

遼東地域と韓半島西北部先史土器の編年と地域性

古澤 義久

要旨 本稿では韓半島の新石器時代から青銅器時代にかけての先史土器文化を東北アジア的視野で理解するための基礎的作業として小地域ごとの編年及び併行関係の策定を行った。その結果、我が国では従来、遼東半島呉家村期は大同江流域南京1期に併行するという見解が有力であったが、極東平底土器分布圏内における大同江流域系土器を通して呉家村期が金灘里1期に併行する可能性が高くなり、北韓の研究者の主張に近いものとなった。また、中国側では新しい年代が想定されていた単砒子包含層も鴨緑江側との対比の結果、北韓の研究者の想定年代に近いものとなった。以上の併行関係を踏まえ地域間の関係の変遷を検討した結果、各小地域があるときは核地域となり、あるときは周辺地域となるという非常に動的な展開をみせていたことが判明した。

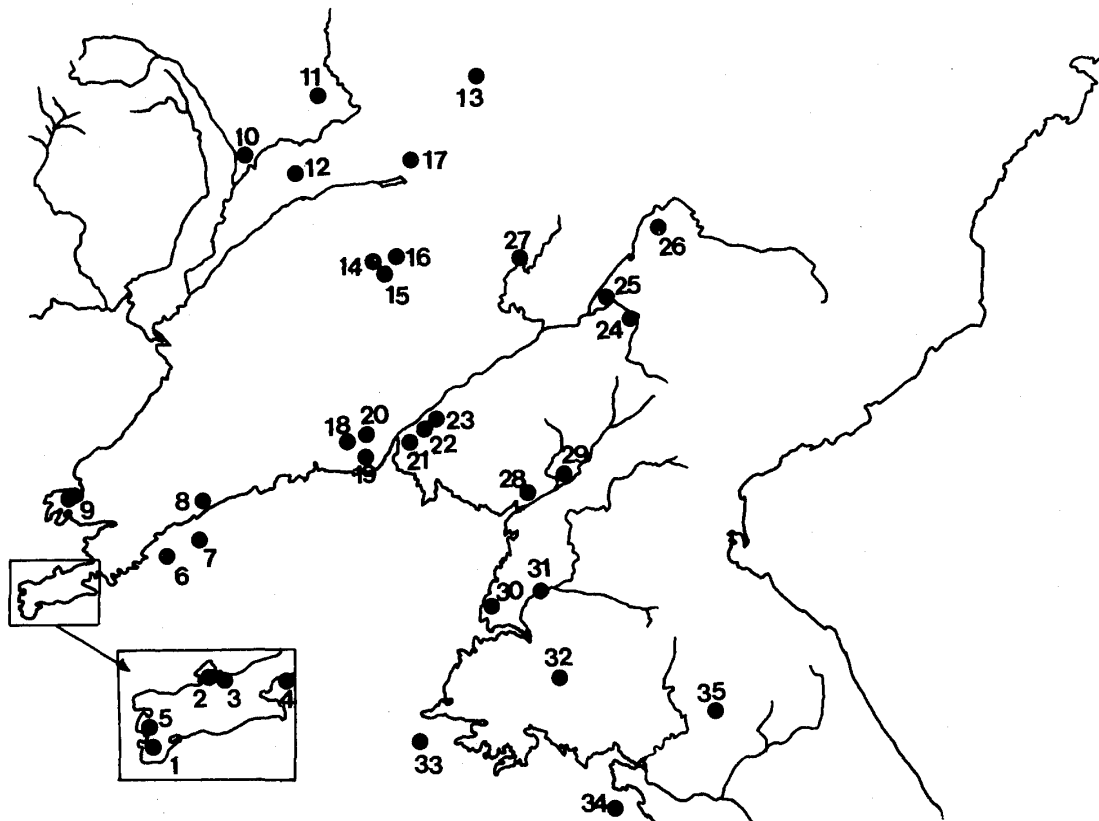
I. 本論文の目的

新石器時代の清川江・咸鏡南道以南の韓半島¹⁾では尖底・丸底のいわゆる「櫛目文土器」²⁾が分布しており、その境界以北に分布する「極東平底土器」(大貫 1998)、「東北亜平底土器」(白弘基 1993)とは区分される様相を呈している。この丸底の土器は東北アジアの中でも若干特異な土器ではあるものの、韓半島もアジア大陸の一部であり、やはり東北アジアの新石器文化を構成する一文化であることは否定できない。従って、韓半島丸底土器が東北アジアの中でどのような位置付けを占めていたのかについて考察する必要性が生じてくる。このような観点での研究は日帝時代から追及されてきた伝統的なテーマであり、1980年代後半にはおおむね多くの研究者の中で共通認識が固まってきている。そのためこのような研究主題は近年ではそれほどなされていないというのが現況である。

しかしながら、その後、新資料が増加し、また過去の資料の洗い直しがなされると従来の考え方では説明ができない現象が出てきているのも、また事実である。

韓半島丸底土器を東北アジアの中で正しく位置づけるためには、まず時間軸である両地域の編年を正しく行い、その後両地域の併行関係を正しく策定する必要性が生じる。韓半島丸底土器を極東平底土器の編年体系に対応させるためには2つの研究方針がある。一つは江原道嶺東地域—咸鏡南道—豆満江流域・南沿海州・牡丹江流域という東北方面で連結する方針である。しかし、資料上の不足から咸鏡南道と豆満江流域の併行関係を策定することが大変困難な状況である。

そこで本稿ではもう一つの方針である大同江流域—平安北道—丹東地区—遼東半島という西北方面で韓半島丸底土器と極東平底土器を対比する。この方針は伝統的に用いられてきた方針であり、北韓の研究者や我が国の大貫や宮本の研究(社会科学院考古学研究所・歴史研究所 1969; 小川 1982; 宮本 1985, 1986, 1995 など)によってほとんどなされつくされた感があるものの、これまでの研究者の想定は本当に正しかったのかについて以下に検討する。



- 1 郭家村, 2 文家屯, 3 双砬子, 4 大嘴子, 5 大藩家村, 6 小珠山, 7 上馬石, 8 単砬子,
9 三堂村, 10 偏堡・高台山, 12 肇工街, 13 西断梁山, 14 張家堡, 15 廟後山,
16 馬城子, 17 望花, 18 石仏山, 19 大崗, 20 後窪, 21 双鶴里, 22 新岩里, 23 美松里,
24 公貴里, 25 深貴里, 26 土城里・長城里, 27 五女山城, 28 堂山, 29 細竹里,
30 弓山, 31 金灘里, 32 智塔里, 33 大延坪島, 34 永宗島, 35 軍彈里

図1 本稿に関する遺跡

韓半島では丸底土器を用いた新石器時代の後に、平底の無文を主とする土器を用いる青銅器時代に入る。遼東半島では新石器時代から青銅時代への変化が比較的連続的に迫るため本稿では新石器時代中期から青銅器時代にかけて、韓半島の所謂「無文土器」成立期までを対象に上記の併行関係を策定した後、土器から看取できる地域性や地域間の関係、およびその変遷について述べることで、当該地域の土器文化動態の一端を示したいと思う。

II. 遼東半島の編年

遼東半島の新石器時代の編年研究は、佟柱臣によって始められた（佟柱臣 1961）。その後、1963～1965 年の中朝合同調査により山東龍山併行期以降の編年が確立した（朝中共同発掘隊 1966；中国社会科学院考古研究所 1996）。また数次に亘る長海県広鹿島や大長山島の遺蹟の調査がなされ（許明綱ほか 1981）、その成果を踏まえ許玉林・許明綱・高美璇は遼東半島の新石器時代に関して小珠

山下層類型→小珠山中層類型→小珠山上層類型→於家村下層類型という変遷観を示し（許玉林・許明綱・高美璇 1982）、その後の編年の基礎となった。

小珠山中層類型について小川（大貫）静夫は郭家村 4 層に関して呉家村との類似を説き（小川 1982）、宮本一夫は同様の観点から小珠山中層期と呉家村期を分離した（宮本 1985）。宮本はその後、郭家村 3 層を分離し、呉家村期に後続するとしている（宮本 1990）が、千葉基次は郭家村 5 層を郭家村下層、郭家村 4・3 層を郭家村中層と分期し、4 層と 3 層では同様の要素を持つ土器が見られることから、4 層と 3 層の分離には否定的である（千葉 1990）。孫祖初も宮本と同様に郭家村 5→4→3 層という逐次変化を想定している（孫祖初 1991）。趙輝は小珠山中層文化について郭家村 5・4 層を呉家村と併行とし、郭家村 3 層を分離している（趙輝 1995）。金英熙は郭家村 5 層を呉家村期に位置づけ後続する段階として郭家村 4 層→3 層という段階を想定している（金英熙 2002）。このように小珠山中層類型の細分において郭家村の層位における逐次変化を認定するかどうかによって、見解に相違をみせているもののおおむね小珠山中層→呉家村という変化方向は認定されている。現在では呉家村と小珠山上層の間に偏堡類型を位置づける見解（陳全家・陳国慶 1992；宮本 1995 ほか）がおおむね認められている。

郭家村上層は双砵子 1 期と 2 期の間に位置づけられたことがあった（社会科学院考古学研究所・歴史研究所 1969）が、現在では小珠山上層に位置づける見解が広く認められている。

以上の研究史を踏まえ、東大文学部所蔵（図 7、表 1）³⁾・京大所蔵文家屯、東大所蔵郭家村資料について適宜、触れながら若干の考察を試みたい。まず、文家屯（澄田 1986；遼東先史遺跡報告書刊行会 2002）では少数の小珠山下層期に属する滑石入り土器が見られる。そして、小珠山中層期、呉家村期、偏堡類型、小珠山上層期の土器が見られるが、A 地点は呉家村期の土器が主体的で、C 地点では偏堡類型の土器が主体的である⁴⁾。

上述したように小珠山中層期と呉家村期は郭家村遺蹟の 5 層と 4 層をもとに分期が可能になったという経緯があるが、型式学的に見ても変遷過程を把握することができる。

京大所蔵文家屯資料には、口縁部文様帯に短斜線文、胴部文様帯に沈線で区画した中を山字状に帯を構成する文様⁵⁾がある。この文様は 2 種に分類できる。

組合文 1：口縁部文様帯の短斜線を刺突・押引で施文し、胴部文様帯は幅 3mm 程度の比較的太めの沈線で施文されるもの（図 2-1, 2）

組合文 2：口縁部文様帯と胴部文様帯が同一の施文手法をとるもの。幅 1～2mm の非常に細い沈線で施文される。（図 2-5, 6, 7, 8）

この分類における口縁部文様帯と胴部文様帯の施文具の差異はそれぞれの相関性が極めて高い。しかし、文様構成は胴部文様帯の山字の頂点に浮文を付すなどほとんど共通し、相互の関連が想定される。

郭家村遺蹟の 5 層では組合文 1 がみられ（図 2-2）、組合文 2 は郭家村遺蹟 4 層で見られる（図 2-6, 7, 8）。従って、この 2 者の関係については時期差であることが想定され、組合文 1 を小珠山中

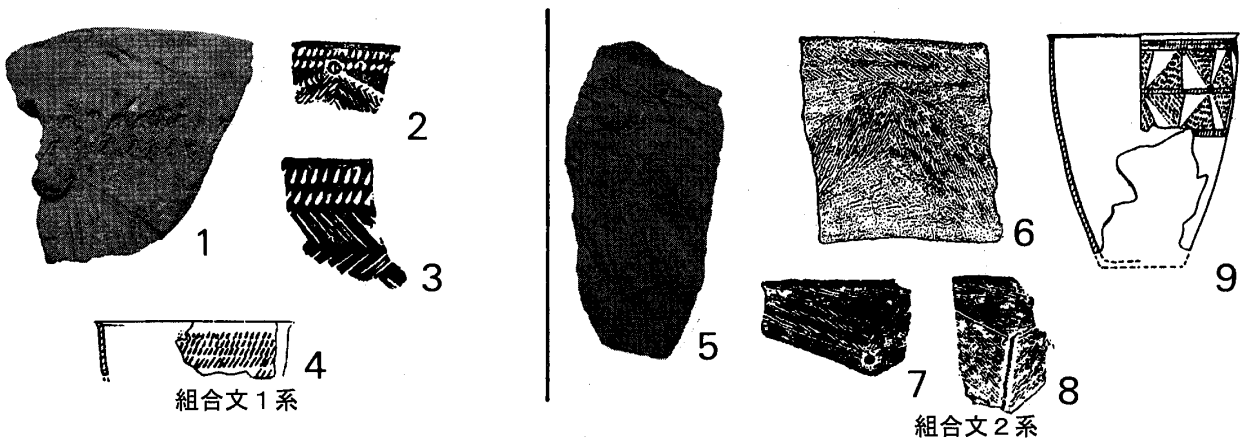


図2 組合文比較 (1, 5 文家屯A, 2, 3 郭家村⑤, 4 北莊1期, 6~8 郭家村④, 9 北莊2期)

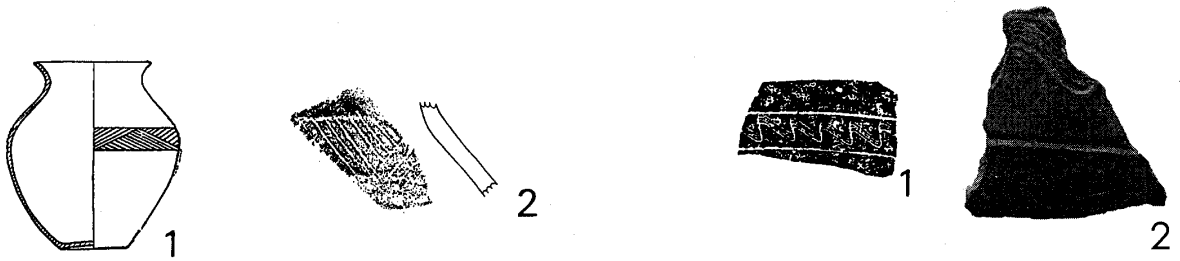


図3 壺の比較 (1 上馬石 F 1 S = 1/8, 文家屯 C S = 1/4)

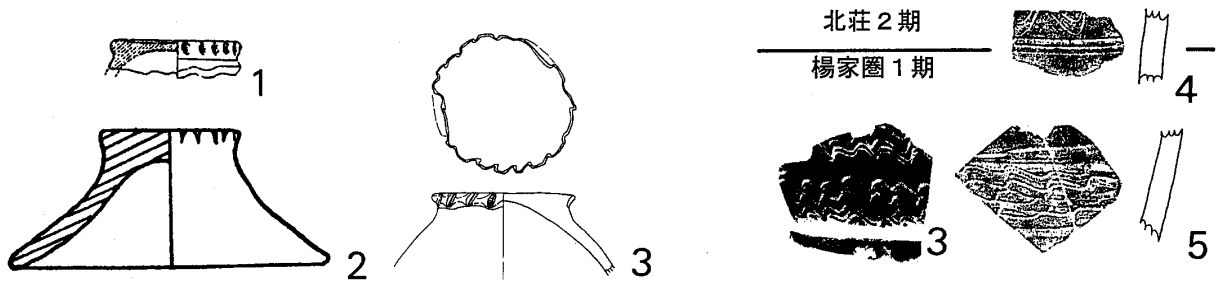


図5 器蓋 (1 於家店, 2 小管村, 3 文家屯C, S = 1/4)

図4 水波文土器 (1 北莊2期, 2 文家屯A, 3 楊家圈4, 5 文家屯C, S = 1/4)

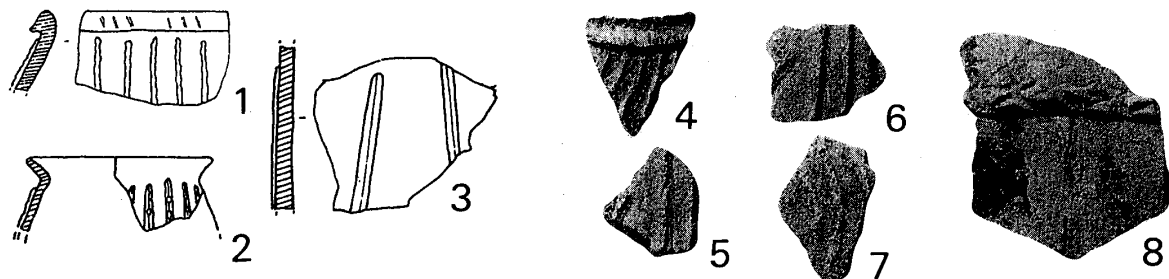


図6 遼東半島東部の偏堡類型 (1 小業屯, 2 歪頭山, 3 魚山, 4 塔寺屯, 5~8 花山屯, S = 1/4)

層期、組合文2を呉家村期と断代することが可能である。そして、小珠山中層期と呉家村期の連続性を明らかにすることができる。組合文2にみられる非常に細い沈線で施文されるのは組合文以外の文様でもみられ(図7-1, 2, 3, 6)、呉家村期の特徴と考えることができる。さらに呉家村期ではミガキ調整がさかんになされるようになるという特徴があり、岡村秀典と松野元宏による文様と調整の変遷による呉家村期内の細分化の試図(遼東先史遺跡発掘調査報告書刊行会2002)は筆者には当否は判断できないが、興味深い見解である。廟島群島では、北荘遺蹟H103(張江凱1997)において北荘1期と認められる盆形鼎とともに筒形罐が出土しているが(図2-4)、この筒形罐は押引による短斜線を施文したもので筆者分類の1に該当し、小珠山中層期のものである。また、北荘2期とされるH122(張江凱1997)では呉家村期的な文様に浮文が施された筒形罐が出土しており(図2-9) 整合的である。

壺に関しては、これまで呉家村期の段階では無文の壺が知られるのみであった(許明綱ほか1981)。東大・京大の文家屯遺蹟資料の中には三角組帯文などが頸部に施文された土器が確認された(図3-2, 図7-8)。これらの土器は文様帯の部分を残し、頸上部に丹念にミガキをかけている。このような器面調整は先述のように小珠山中層期から呉家村期の深鉢にも見られ、これらの壺は小珠山中層期～呉家村期のものと考えることができる。そして、文様構成の類似から小珠山下層期の上馬石1号住居址から出土した壺(図3-1)の系譜を引くものであると考えられる。この上馬石1号住居址出土の壺は小珠山下層期のなかでも遅い段階のものであると想定する研究者も多い。

呉家村期の膠東半島系土器として透窓のある豆が見られるが(図7-12～14)、膠東半島では北荘2期⁶⁾の北荘2期層、於家店M1(北京大学考古実習隊ほか2000b)などで出土している。なお、透窓の形は北荘2期層、於家店M1では三角形で、京大・東大所蔵文家屯資料も三角形の透窓をもつものもあるが、文家屯A地点では円形の透窓も認められる。その他に呉家村期に属すると思われる土器として水波文施文土器が挙げられる。膠東半島では李歩青と王錫平が指摘するように(李歩青・王錫平1988)、北荘2期に特徴的な遺物である(図4-1)。文家屯で出土する水波文土器(図4-2, 4, 図7-11)は焼成が堅緻で、灰褐色に発色するものが多く、他の赤褐色を呈し、相対的に柔らかい焼成の在地系の土器とは明確に区分される点から搬入品である可能性が高い。岡村や松野は遼東半島で出土する山東系の土器のほとんどは色調、文様、彩色方法など山東半島のものとはほとんど区別できず、模倣品ではなく、搬入土器であると述べている(岡村1992; 遼東先史遺跡発掘調査報告所刊行会2002)。遼東半島の膠東半島系の土器のほとんどが搬入品であるかどうかについては筆者としては慎重な立場に立つが、搬入品の候補として水波文施文土器は有力なものである。

文家屯C地点では偏堡類型の土器が中心に見られる。宮本の指摘のように三堂村1期(陳全家ほか1992)の組成に近い。本稿ではこの段階を三堂村1期とする。これらはほとんど後述の東高台山タイプに近く(図7-15など)、肇工街タイプはみられない。偏堡類型の土器(東高台山タイプ)は滑石を混入するのが特徴である。また、器面を板状工具でナデつけて調整する個体が多い。これらは小珠山中層期や呉家村期の土器には見られない特徴で、多くの研究者が論じるように偏堡

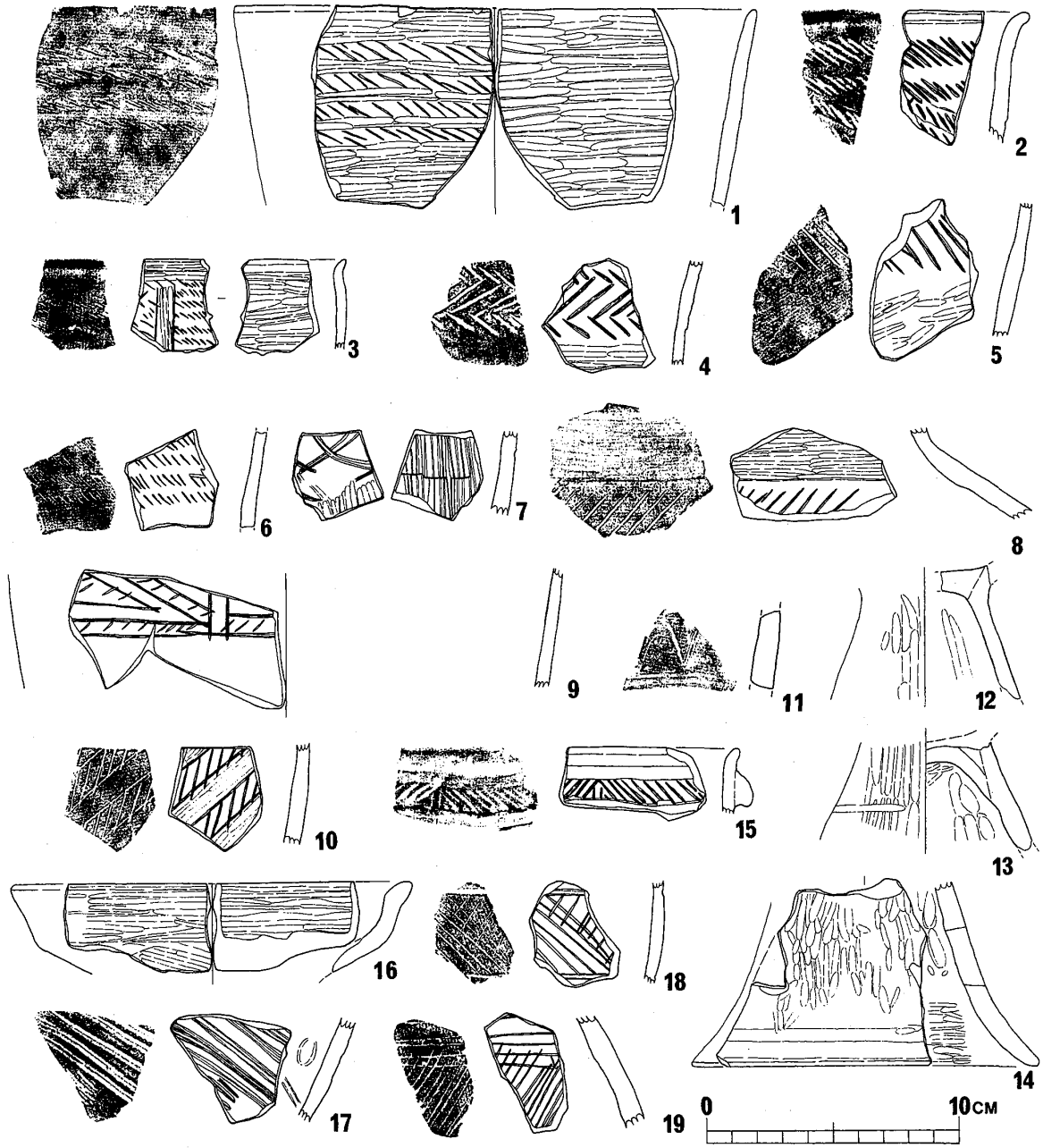


图7 東京大学文学部所藏文家屯出土土器 (S = 1/3)

表1 東大所蔵文家屯土器観察表

番号	時期	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調		調整	
						外面	内面	外面	内面
1	呉家村	筒形罐	口径20.8	白雲母少量	良好	赤褐	褐	ヨコミガキ	ヨコミガキ
2	呉家村	筒形罐		石英	やや甘	赤褐	赤褐	ミガキ	ミガキ
3	呉家村	筒形罐		石英	良好	暗褐	暗黄褐	ミガキ	ヨコミガキ
4	小珠山中層~呉家村	筒形罐		石英	やや甘	赤褐	褐	ミガキ	指頭圧痕
5	呉家村	筒形罐		粘土質	良好	赤褐	赤褐	斜位ミガキ	ヨコミガキ
6	呉家村	筒形罐		石英	やや甘	赤褐	赤褐	ヨコミガキ	ナデ
7	呉家村	筒形罐		石英	良好	黒褐	褐	タテミガキ	工具痕
8	小珠山中層~呉家村	壺肩部		石英	良好	赤褐	赤褐	ヨコミガキ	ナデ
9	呉家村	筒形罐		石英	良好	淡褐	淡灰褐	ミガキ	ヨコミガキ
10	呉家村	筒形罐		石英	良好	赤褐	赤褐	斜位ミガキ	ナデ
11	呉家村(北柱2期)	不明		粘土質	良好	灰褐	灰褐	ナデ	ナデ
12	呉家村~三堂村1期	豆		石英	やや甘	赤褐	赤褐	タテミガキ	タテミガキ
13	呉家村~三堂村1期	豆		石英	やや甘	赤褐	赤褐	タテミガキ	タテミガキ
14	呉家村~三堂村1期	豆	脚径13.8	石英	やや甘	赤褐	赤褐	タテミガキ	ヨコミガキ
15	三堂村1期	筒形罐		滑石少量	やや甘	暗赤褐	黄褐	ナデ	ナデ
16	小珠山上層	筒形罐	口径16.0	石英	良好	黒灰	黒灰	ミガキ	ヨコミガキ
17	小珠山上層	折縁罐		石英	良好	暗灰褐	黒灰褐	ナデ	ナデ
18	小珠山上層	折縁罐		石英	やや甘	黄褐	暗黄褐	ナデ	ナデ
19	小珠山上層	折縁罐		石英	甘	黒褐	褐	ナデ	ナデ

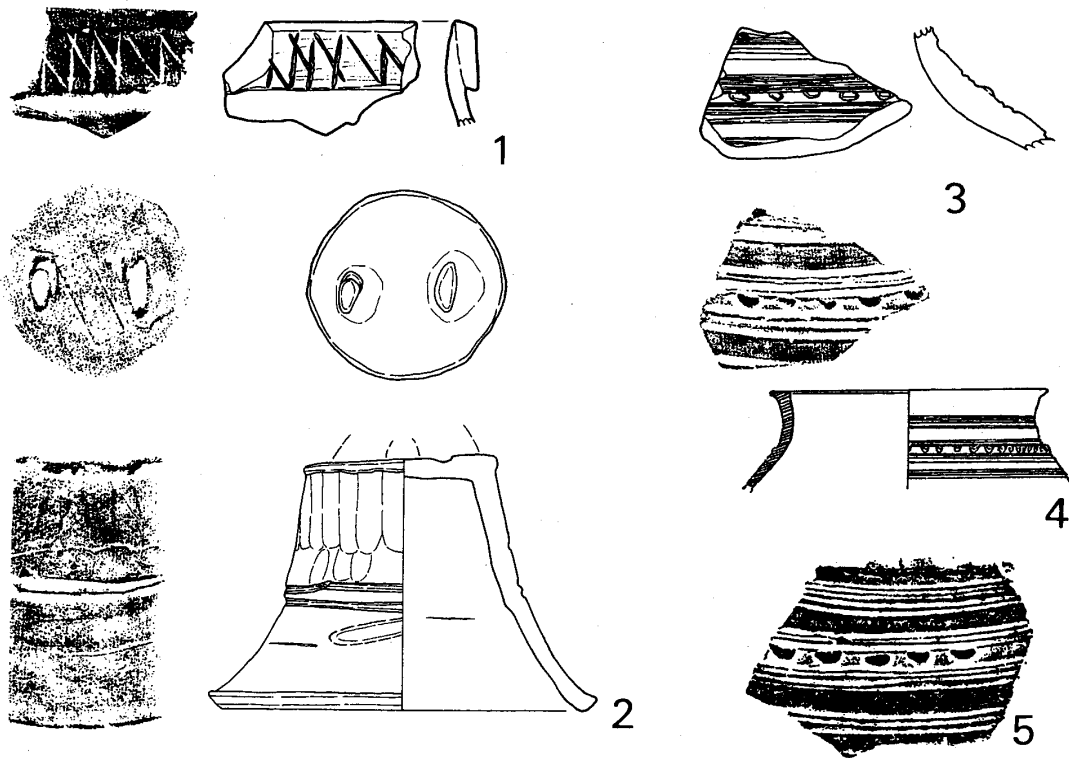


図8 東大所蔵郭家村及び関連遺物 1, 2, 3 郭家村 4, 5 大口 (S = 1/3)

表2 東大所蔵単砵子土器観察表

番号	時期	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調		調整		原注記	浜田1929との対応関係
						外面	内面	外面	内面		
1	双砵子1期後半	広口壺	口径19.8	石英	良好	赤褐	赤褐	タテ・ヨコミガキ	ナデ・工具痕	「島北」	図版23-3
2	双砵子1期後半	広口壺		石英	良好	暗褐	暗褐	不明	工具痕	「島北口」	
3	双砵子1期後半	壺		石英	やや甘	赤褐	赤褐	不明	工具痕		
4	双砵子1期後半	二重口縁	口径8.6	石英	良好	暗赤褐	褐	ヨコミガキ	ナデ	「島北」	図版23-27
5	双砵子1期後半	豆	口径35.4	石英	良好	暗褐	暗赤褐	ミガキ	ミガキ	「島北」	図版24-28
6	双砵子1期後半	碗	口径13.2	石英	良好	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ・工具痕	「島東」?	図版23-1
7	双砵子1期後半	圓足附土器	脚径12.0	石英	良好	赤褐	淡褐	ミガキ・工具痕	ナデ	「島北」	図版24-18
8	双砵子1期後半	碗	底径8.2	石英	良好	赤褐	黒褐	ヨコミガキ	ヨコミガキ	「島北」	図版24-15
9	双砵子1期後半	大口高領壺		石英	良好	赤褐	暗褐	ヨコミガキ	工具痕	「島北M」	図版24-24

類型の系譜の差異を反映している可能性が高い。なお、偏堡類型（東高台山タイプ）の土器は遼東半島の東側・西側を問わず出土している。遼東半島西側では三堂村1期層、交流島（王王从ほか1992）、石灰窯村（劉俊勇・王王从1994）、大藩家村（劉俊勇1994）などでみられる。遼東半島内部での地域差を強調するあまり、遼東半島東側には偏堡類型が分布しないと考える研究者もいる（大貫1998など）が、遼東半島東側でも小業屯、歪頭山、魚山（王嗣洲・金志偉1997）、塔寺屯、花山屯（澄田1990）等でみられるように偏堡類型（東高台山タイプ）が確実に分布している（図6）。

さて、宮本は京大所蔵の文家屯資料の様相を検討し、文家屯A地点を呉家村期に、C地点を偏堡類型の段階と想定し、文家屯A地点で呉家村期の土器と偏堡類型の土器が出土していることから両者が一時共存していたと解釈した（宮本1995）。しかし、文家屯A地点では呉家村期を主とするものの、小珠山上層期の土器もみられ、混在である可能性が高い。遼東半島の郭家村4層や小珠山遺蹟中層などでは呉家村期の土器と偏堡類型の土器が明確に共伴するということが確認された事例はなく、逆に文家屯に近接した偏堡類型（東高台山タイプ）の土器が出土する大藩家村では呉家村期の土器の出土はない。従って、呉家村期と三堂村1期それぞれの単独時期があったことは確実である。ここでは偏堡類型を呉家村期とは異なる時期のものとして考えておきたい。김영근も呉家村期を含む小珠山中層類型と偏堡類型の時期が異なることを論じている（김영근2004）。

膠東半島系土器として縁に刻目をもつ蓋が、偏堡類型が主体の文家屯C地点で出土している⁷⁾（図5-3）が、膠東半島では、楊家圈1期に近い文化内容をもつ小管村1期層（北京大学考古学実習隊ほか2000）および採集品ではあるが於家店（蔣英炬1963）などでも出土している（図5-1,2）。なお、文家屯例は木板状工具で刻みを入れている。また、楊家圈1期（北京大学考古実習隊ほか2000a）にも水波文があるが、これは北荘2期のものとは異なり、より太い工具で乱雑に施したものである（図4-3）。これに類似した資料は遼東半島側では偏堡類型が主体の文家屯C地点（図4-5）や大藩家村で出土している。大藩家村では偏堡類型（東高台山タイプ）の段階の土器から小珠山上層期の土器が出土しているが、その他の小珠山上層期の遺蹟からは水波文の施文された土器の報告はなく⁸⁾、偏堡類型に伴うものであろう。膠東半島でも水波文は楊家圈2期以降では報告されていない。以上の点からこれまでの見解（小川1982；王錫平・李歩青1987；許明綱1989；佟偉華1989；宮本1990など）のように呉家村期は北荘2期と併行するものと思われ、三堂村1期は楊家圈1期におおむね併行するものと思われる。その場合、口縁隆帯や三足鉢の形態（図10-28）の類似から偏堡類型（三堂村1期）の淵源を膠東半島の白石村2期に求める見解（朱永剛1993；蘇小幸・王嗣洲1994）があるが、併行関係上からは直接の関連を求めるのは困難である。

先述したように郭家村3層期に関しては独立した一時期と把握する見解と否定的な見解がある。郭家村3層は4層と上層（2・1層）の中間層であるため、呉家村期と小珠山上層期の間であることは確実である。従って、同様に呉家村期と小珠山上層期の間に入る三堂村1期との先後関係が問題になるが、郭家村3層で示されたような組成は郭家村以外では、文家屯を含め他の遼東半島の遺蹟では明確にはわからないので、判断できない。郭家村3層からは偏堡類型の土器は報告されてい

ない。千葉の指摘のように呉家村期の土器と関連する土器も郭家村3層では出土している一方、新しい要素も見られるので呉家村期に近接した時期であろう。そして、筒形罐の胴部に一組のつまみを設ける点などは膠東半島に起源が求められるものと思われ、郭家村が膠東半島に最も近接しているという地理的状況の特殊性により膠東半島系の土器が多く見受けられる郭家村3層の位置付けが難しくなっているものと思われる。膠東半島との関係で考えた場合、郭家村3層は宮本の指摘のように楊家圈1期と併行する（宮本1990）のであれば、同様に楊家圈1期と併行すると思われる三堂村1期と時期的に重なる部分がある可能性もある。今後の資料の増加を待つて考察したい。

遼東半島では偏堡類型（東高台山タイプ）の土器は小珠山上層期の土器に完全に置き換わる。小珠山上層期にはそれまでの筒形罐のほか山東龍山文化の影響を受けた折縁罐を中心に三環足器、単耳杯など膠東半島の龍山文化と共通する器種が多く見られるようになる。東大文学部所蔵郭家村資料は1928年の東亞考古学会と関東庁博物館による牧羊城址に関する調査の際、合わせて郭家村遺跡を調査された際に採集された資料である（原田・駒井1931；古澤2005，印刷中）。ここでは、郭家村下層（小珠山中層期，呉家村・郭家村3層期）と郭家村上層（小珠山上層期）の土器がみられる。その内小珠山上層期の遺物には在地系の二重口縁筒形罐がある（図8-1）。そして、この二重口縁部の施文方法には、筆者が確認した例では木板や丸棒状工具を押捺したもののみがみられ、沈線技法のものは認められなかった。一方、偏堡類型の口縁隆帯も木板や丸棒状工具で隆帯上に施文しており類似性が看取される（図7-15）。折縁罐については筆者が既に論じたことがある（古澤2005）が、回転を利用して施文を行う折縁罐Ⅰ類（図11-6）と横走魚骨文などが施文される折縁罐Ⅱ類（図11-5）の両者がみられる。折縁罐の施文は多歯具でなされるものがあるが（図7-17）、多歯具による施文は小珠山上層期に特徴的である。王錫平や李歩青、佟偉華らが主張するように（王錫平・李歩青1987；佟偉華1989）、櫛歯状の工具で回転を利用し、浮文を切るような形で施文した罐（図8-3）は、膠東半島では大口遺蹟1期晩期（呉汝祚1985）（図8-4, 5）、遼東半島では、郭家村上層（許玉林・蘇小幸1984）、老鉄山積石塚M1（6）室（陳連旭1978）、將軍山積石塚（朝中共同発掘隊1966；中国社会科学院考古研究所1996）にみられる。大口2期や双砵子1期層で見られる罐（図11-31）はこれの後続型式であると考えられる。なお、このような弦文罐は趙輝によると山東地域のなかでも特に膠東半島に多いものであるという（趙輝1993）。蓋は原報告（原田・駒井1931）では鉢として報告されているものの頂部に環状把手のついていた痕跡が明瞭に残ることから蓋であることが判明した（図8-2）。この蓋の体部には2条の沈線が施され、縁に粘土のたまりがあり、縦にミガキ調整を行っているが、このような蓋ないし杯⁹⁾の類例は解放後に調査された郭家村（許玉林・蘇小幸1980, 1984）以外では、洪子東西大礁貝丘（許明綱1961；許明綱・於臨祥1962）（図11-23）にもみられる。洪子東例にも2条の沈線が入り、縁に粘土たまりがあることがわかり、郭家村例と器形・文様・調整などの特徴が一致する。

於家村下層は許玉林・許明綱・高美璇（許玉林・許明綱・高美璇1982；許明綱1987）らによって双砵子1期として考えられている。王青は山東龍山文化併行期である遼東半島の小珠山上層期か

ら双砒子1期の文化を山東龍山文化の郭家村類型と把握しており¹⁰⁾、於家村下層の資料が小珠山上層期に後行し、一部は双砒子1期段階である事を示している(王青1995, 1998)。王青の指摘のように於家村下層の資料は小珠山上層期から双砒子1期の遷移的な様相を示し、折縁罐の比率が減少し広口壺が主体的に見られ、彩絵陶がみられることから本稿では双砒子1期に含めて考えておく。

双砒子1期には広口壺を中心に罐、豆、碗などがみられ、小珠山上層期で主体的であった折縁罐は極めて少なくなり、また、折縁罐の形態も宮本が指摘するように外反口縁が徐々に直立化してくる(宮本1985)。双砒子遺蹟1期層では海參罐(図11-36)が見られるがこの器種は小珠山上層期の郭家村上層(図11-17, 18)、大藩家村、文家屯(劉俊勇ほか1994)で確認でき、小珠山上層期との連続性を看取できる。また、先に指摘した小珠山上層期の弦文罐の後続型式と思われるもの(図11-31)も出土しており、双砒子1期の中でも、特に双砒子遺蹟1期層は小珠山上層期との連続性を看取できる遺物がみられる。

双砒子1期の土器を考える上で重要な資料が単砒子の資料である(図9, 表2)。単砒子は普蘭店市に所在する遺蹟で、八木奨三郎により発見され(八木1924)、1927年東亞考古学会と関東庁博物館の共同調査が行われた遺蹟である(浜田1927, 1929; 島田1927)。この時の調査資料の大部分は京都大学に所在するが、東京大学文学部にも若干数が存在する。以下では、東大文学部所蔵の単砒子包含層資料について紹介すると共に、これに関連する諸問題について述べたいと思う。

1は広口壺である。口唇部は面取りされ、頸部と胴部の境界に沈線が1条めぐり。外面はミガキ調整で、内面の上部はナデ調整がなされ、下部は工具痕が明瞭に残る。2は広口壺である。頸下部には沈線が施される。内面には木板状調整具による工具痕が明瞭に残る。3は罐である。口唇部は面取りされているが、外面と内面に若干突出している。内面には板状調整具による痕跡が残る。2～3条の沈線がめぐり。4は二重口縁部である。二重口縁下端部に刻目がはいる。外面はミガキ調整である。5は豆の杯部である。口唇部は面取りがなされ、内傾している。外面には1条の沈線がめぐり。内外面ミガキ調整がなされる。6は碗である。口縁部は面取りされ、内面に若干突出する。7は圈足である。脚下部に1条の沈線がめぐり。外面には板状工具の調整痕をミガキで消しているが、工具痕が残っている。8は碗である。底部に刻目をもつ。外面は細かなミガキが施され、内面にもミガキが施される。9は大口高領壺である。頸部に木板状工具による刻目が付された隆帯がめぐり。隆帯部分以外の外面にはミガキが施される。内面は木板状の調整具による工具痕が明瞭に残る。

さて、単砒子包含層の資料はこれまでどのように編年されてきたであろうか。北韓では単砒子包含層を彩絵陶の存在から双砒子1期としている。しかし、頸部に刻目隆帯がめぐり大口高領壺(図9-9)や、下端部に刻目を持つ二重口縁土器(図9-4)は双砒子2期と断代している(社会科学院考古学研究所・歴史研究所1969)。この時、北韓は二重口縁や隆帯附土器の出土する郭家村上層および偏堡類型の退化傾向を示す肇工街や双鶴里を双砒子2期に編年していた関係¹¹⁾で、そのような見解が導き出されたものと推察される。上述したように今日では郭家村上層の二重口縁土器は小珠山上層期のもので関係は薄いものと思われる。大貫は単砒子包含層が本来の在り方を示している

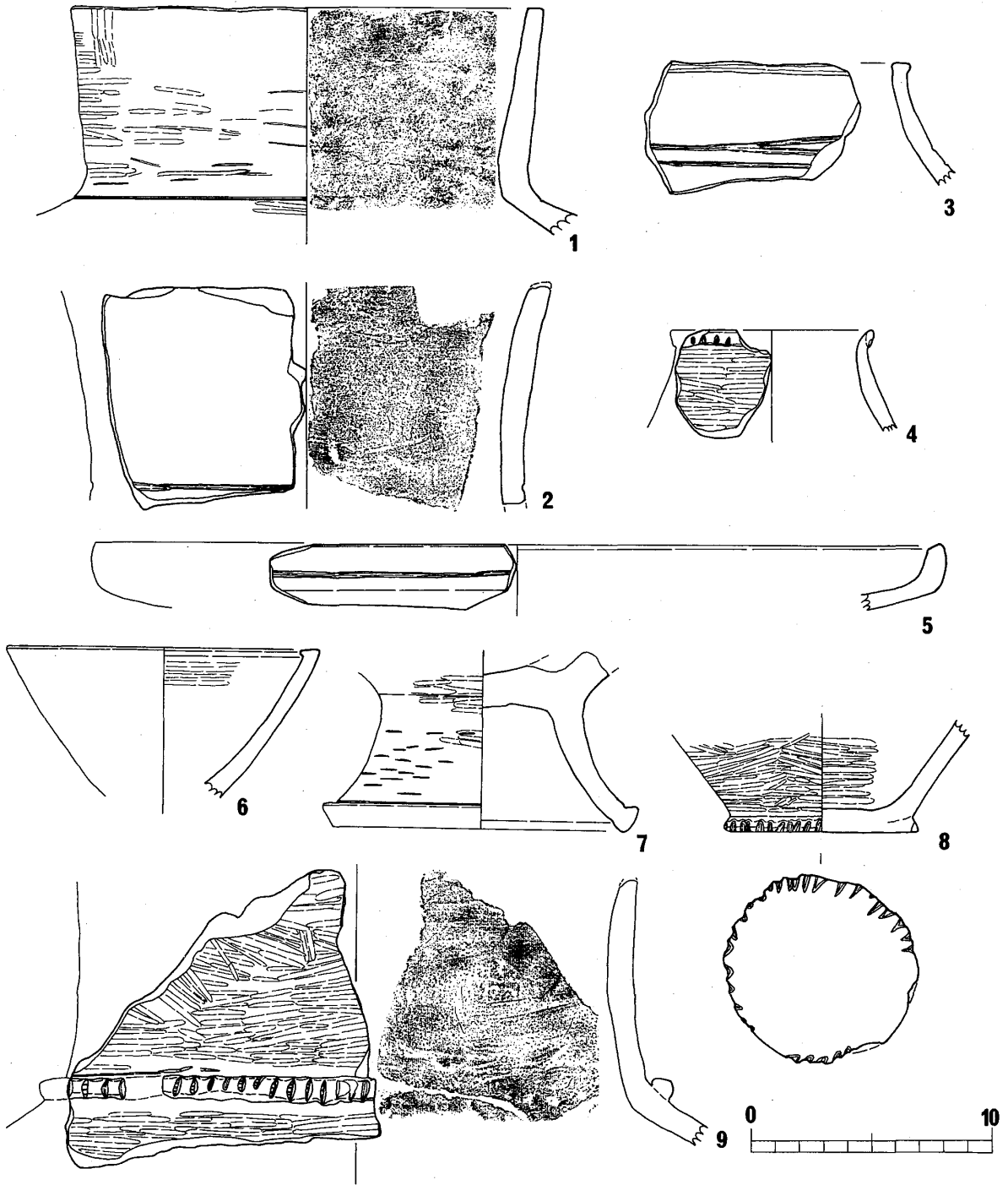


図9 東京大学文学部所蔵単砵子出土土器 (S = 1/3)

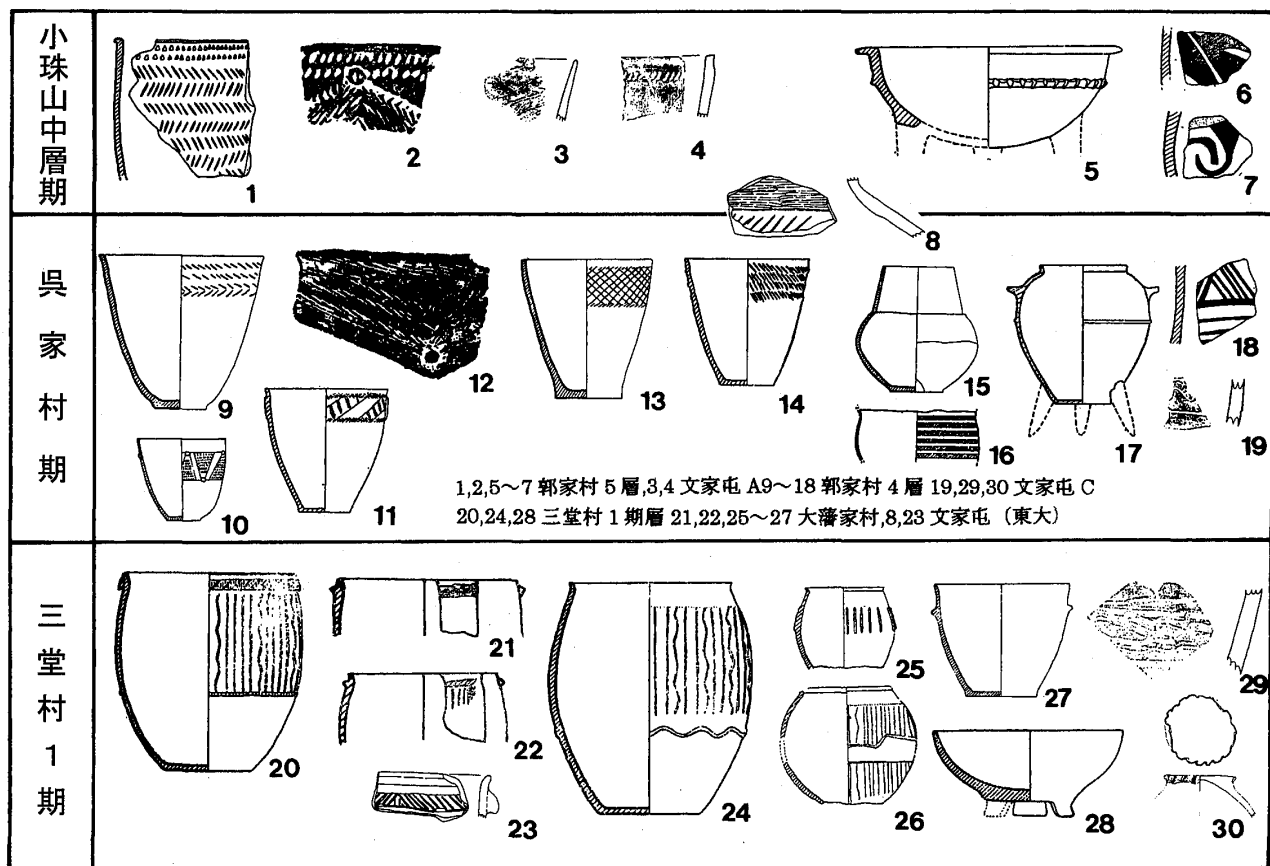


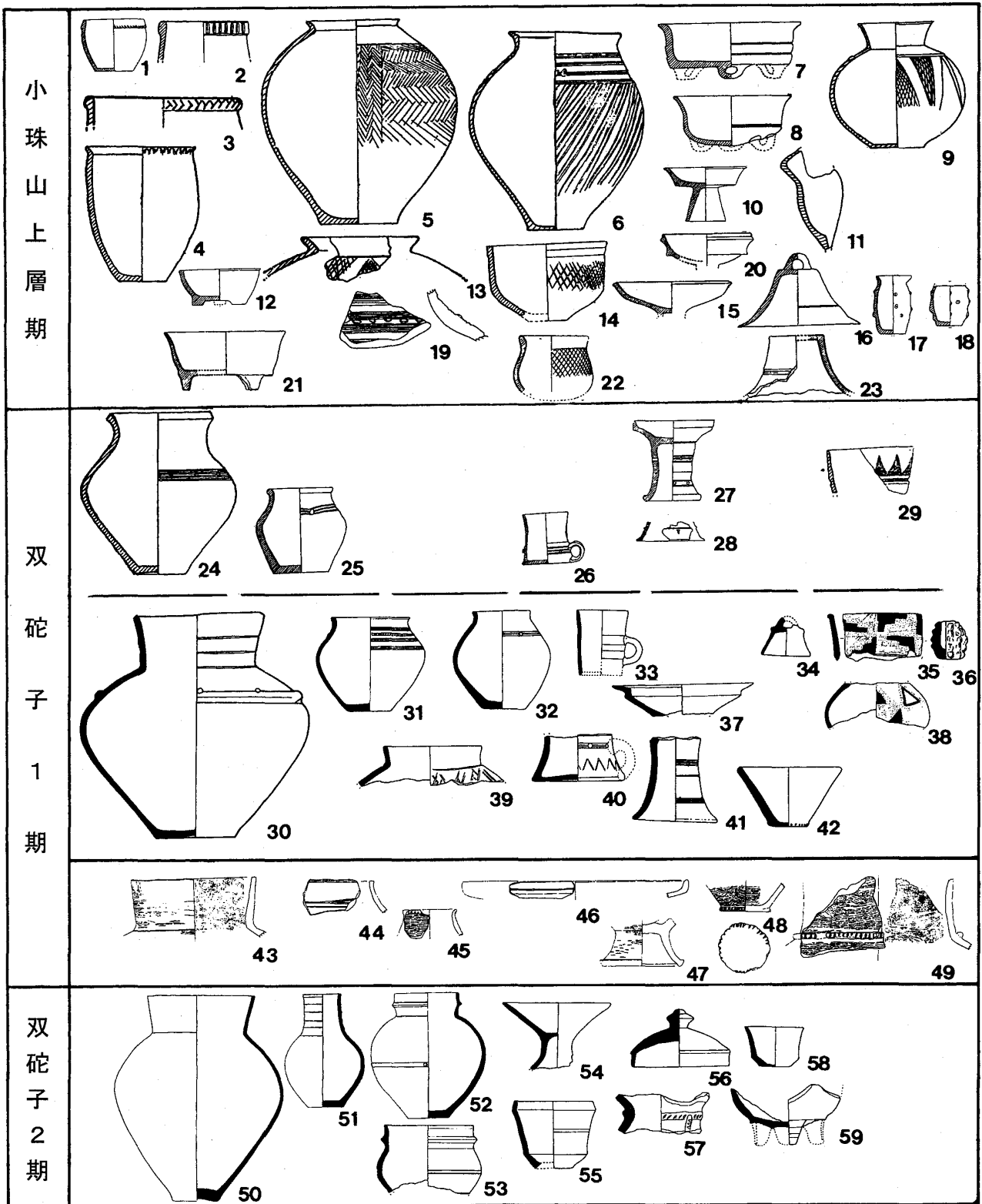
図10 遼東半島土器編年図1 (S = 1/10 破片は1/5)

のかどうか疑問を呈しつつも双砮子1期段階においている(小川1982)。徐国泰は双砮子1期と単砮子一部遺物では別段異なる点はないとし、併行関係にあることを示した(徐国泰1986)。中国側では単砮子包含層を双砮子3期に置く見解が多い(陳光1989; 卜工1999など)が、徐光輝は刻目突帯文のめぐる大口高領壺(図9-9)を双砮子2期におく(徐光輝1997)。後述するように蔡鳳書は単砮子包含層に春秋前期という遅い段階のものが存在すると指摘している(蔡鳳書1993)。千葉は平行沈線の施された土器をもとに於家村下層と双砮子1期の間に単砮子包含層を年代づけた(千葉1996)。

少なくとも上で示した東大所蔵単砮子包含層出土資料は、おおむね外面が赤褐色を呈する点、焼成、内面に木板状調整具の痕跡を残す点(図9-1, 2, 9の内面参照)などが共通し、ほぼ同一時期のものであると判断される。底部の縁に刻目をもつ碗は双砮子1期文化層や烈士山貝丘(安志敏1962)などでも見られ、内傾する口縁の弦文罐(図9-3)は大嘴子1期層やH7(大連市文物考古研究所2000)などでみられるため、組成としては双砮子1期と想定される。

子母口(受け口)罐が相伴していることから双砮子2期に断代される単砮子1号墓出土の広口壺(図11-50)と単砮子包含層出土広口壺(図9-1)は口唇部が面取りされるなど共通する要素もあるものの、単砮子1号墓出土の広口罐は全く沈線が施されないのに対して、単砮子包含層のものは頸

遼東地域と韓半島西北部先史土器の編年と地域性



1~3,9~12,14,15,17,18,20 郭家村上層 4,5,16 螺石窟崗 7,8 上馬石中層 13 三堂村 2期層 19 郭家村(東大) 21~23 洪子東
24~27,29 於家村下層 28 高麗城山 30~42 双砵子 1期層 43~49 单砵子包含層 50~52 单砵子 1号基 53~59 双砵子 2期層

図 11 遼東半島土器編年図 2 (S = 1/10)

部と胴部の境界に沈線を持つ。双砮子遺蹟第1文化層ではやや外傾する頸部の広口壺が出土しており頸部と胴部の境界に1条の沈線を施し、頸部および胴上部に数条の沈線が施される。このような様相からは単砮子包含層出土広口壺は双砮子1期文化層広口壺と単砮子1号墓出土広口壺の文様退化の中間的な形態を示しているとも考えられ、双砮子2期に近い時期、即ち双砮子1期後半に位置づけられるものであろう。また、圈足附土器(図9-7)は双砮子1期層、廟山早期層(陳国慶ほか1992)、小黑石砮子(王王从1981;劉俊勇・王王从1994)、大嘴子1期層(大連市文物考古研究所2000)といったそのほかの双砮子1期の遺蹟からの出土はなく、新出傾向である点も看過できない。このように考えると単砮子包含層を双砮子遺蹟1期層より先行させて考える千葉の見解(千葉1996)には検討の余地がある。単砮子包含層出土の豆(図9-5)に関して蔡鳳書は京都大学所蔵資料を観察・実測した結果、中原地区の洛陽中州路(中国科学院考古研究所1959)の東周時代の陶豆との類似を説き、春秋前期と極めて新しい年代を想定した(蔡鳳書1993)。このような豆は遼東半島ではほとんど報告例がないが、後述するように丹東地区の石仏山期(中)にみられる豆(図17-31, 32)と、器形および口唇端部を斜めに面取りする点が類似しており、双砮子1期後半と考えても全く問題がない資料であり、蔡鳳書のように新しい年代を想定する必要はない。豆に限らず、圈足附土器や頸部に刻目隆帯をめぐらせる大口高領壺など、後述するように丹東地区や平安北道(鴨緑江下流域)の土器と関連が深い土器が出土しており、遼東半島ではあるが東側の碧流河附近に所在する貔子窩単砮子において地域色が濃厚に現出している点に注目したい。

その後、山東文化岳石文化と共通する要素を多く持つ双砮子2期となる。ここでは、子母口罐、甗、鼎、盒、つまみのついた蓋(つまみ内部が中空のものもある)、尊形器など岳石文化照格荘類型と共通する器種がみられる一方、双砮子2期にのみ存在する長頸壺(図11-51)などもあり、遼東半島の独自性を示す。また、大貫が解放前に調査された双砮子の資料(江上ほか1934)を用いて、指摘したようにこの段階にも二重口縁の下端部に刻みを施した土器が存在する(小川1982)。但し、二重口縁や刻目の形態も単砮子包含層の資料とは大きく異なる。

続く双砮子3期は壺、罐、杯、圈足附碗等の器種組成を示す。文様では平行沈線に点列文を加えたり、棒状貼付文がみられる。圈足の形態は上記の単砮子包含層の資料とは大きく異なる点が指摘できる。この段階では前段階まで多く見られた遼東半島と共通する要素がほとんどみられなくなる。

Ⅲ. 瀋陽地区の編年

瀋陽市西郊外新民県偏堡(王増新1958)をもとに郭大順・馬沙によって偏堡類型が設定されている(郭大順・馬沙1985)。この偏堡類型はその後、瀋陽地区以外でも発見され、時期的細分を試図した研究も多く見られる。

陳全家・陳国慶は偏堡類型を三堂(陳全家ほか1992)の分析をもとに時期的に三細分している(陳全家・陳国慶1992)。それによると早い段階の偏堡類型は口縁から若干下がった位置に隆帯をめぐ

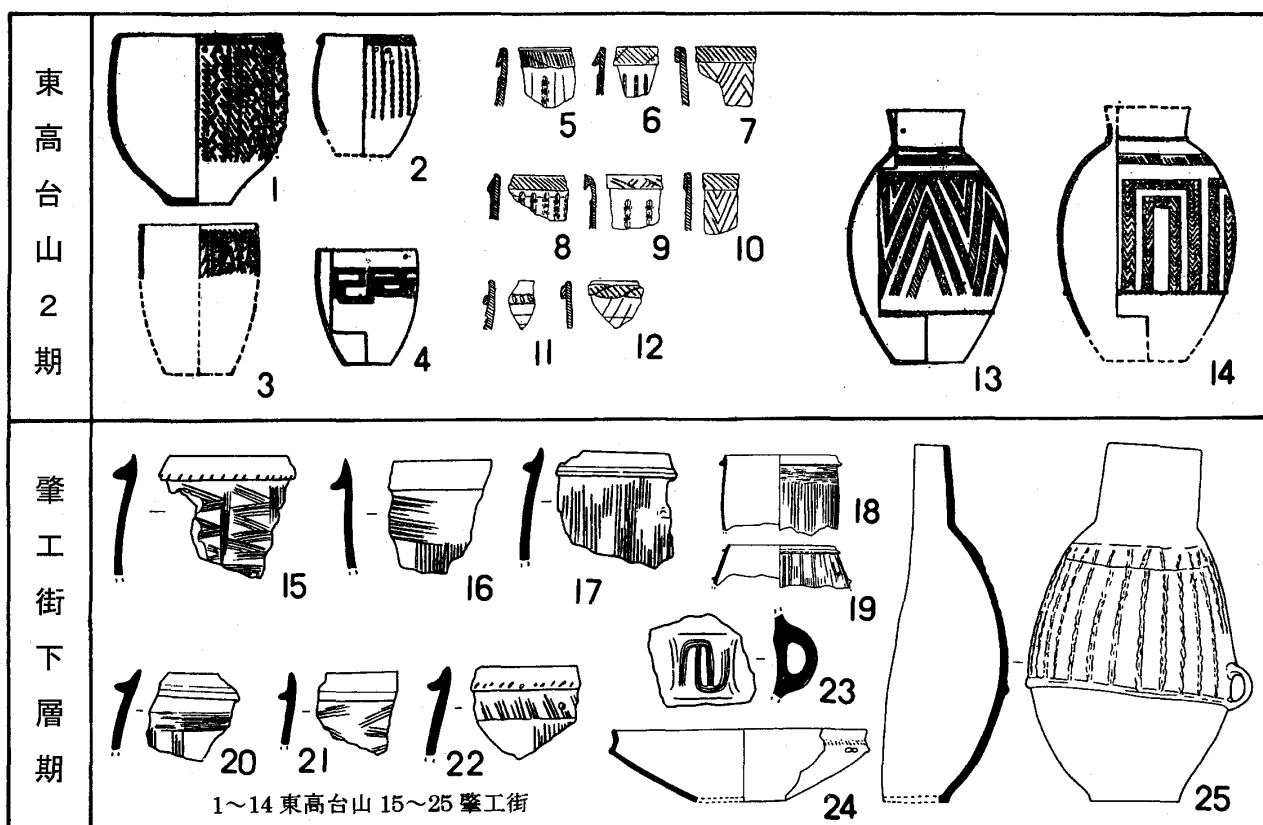


図 12 瀋陽地区土器編年図 (S = 1/10 破片は 1/5)

らせるのに対し、遅い段階のものは口縁に接して隆帯がめぐり（即ち二重口縁）、二重口縁の下部は外を向くようになるという。同様に偏堡類型について論じた朱永剛や李恭篤・高美璇、金英熙も同様の変遷観を示している（朱永剛 1993；李恭篤・高美璇 1998；金英熙 2002）。

瀋陽地区の偏堡類型をみると明らかに東高台山のもの（図 12-1～14）と肇工街のもの（図 12-15～25）は区分され、それぞれ排他的に出土している。東高台山では隆帯が口縁から若干下がったものと二重口縁があるが、縦の隆起線文が施されるものが多い。中には二重口縁を持ち、二重口縁部に施文され、胴部に沈線で縦走魚骨文状に施文したもの（図 12-7, 10）があるが、これは新楽（曲瑞奇・沈長吉 1978）でも類例が出土している。

対照的に肇工街では下端部が外を向く二重口縁のみで胴部は櫛歯状の沈線で施文されるものが多い。ただし、罐以外の器種である壺などには縦の隆起線が施されることがある。

このことから少なくとも出土状況からは 2 時期に分期することが可能であろう。ここでは東高台山タイプと肇工街タイプに大きく 2 群に分離しておく。そして、肇工街では縦位の橋状把手が出土しており（図 12-23）、後述する丹東地区でもそうであるように、新しい様相を呈していると考えられる。多くの論者も肇工街の偏堡類型をより遅いものと位置づけており、筆者もこれに同意する。ここでは東高台山タイプの段階を東高台山 2 期、肇工街タイプの段階を肇工街下層期と設定する。

さて、偏堡類型の上限であるが、瀋陽地区の呉家村期併行期は不詳であるため確実なことは断言

できないが、吉長地区では左家山3期がおおむね小珠山中層に、西断梁山2期が呉家村期に併行することがわかっている（陳全家ほか1990；陳雍1992；金旭東1992；宮本1995；유성진2005）。瀋陽地区と吉長地区の間にある東豊県では西断梁山2期層（龐志国・宋玉彬1991）、得勝小学後山、過道嶺、紅旗後山（唐洪源1996）などで呉家村期同様の土器が出土している。遼東半島と東豊県・吉長地区で呉家村期的な土器が出土している以上、中間地帯である瀋陽地区でも当然、呉家村的な土器の段階があるものと予想される。遼北の康平県では老山頭（許志国1998）などで呉家村的な土器が出土している。

ところで、瀋陽地区の偏堡類型の遺蹟では呉家村期的な土器の出土例はない。従って、瀋陽地区の偏堡類型の上限は呉家村期に遡るものではないことが推測される。そして、先に触れた宮本の遼東半島において呉家村期の土器の中に瀋陽地区を含めた遼河下流域の偏堡類型の土器が侵入するという想定は、瀋陽地区で呉家村期的な土器と偏堡類型（東高台山タイプ）の共伴がない以上、否定される。

三堂で見られたように遼東半島では、東高台山タイプの偏堡類型の次には折縁罐が主要器種となる小珠山上層期に置き換わる。それでは、遼東半島以外ではどのような様相であったのだろうか。瀋陽地区では東高台山タイプ（典型的な偏堡類型）から崩れた胴部に櫛歯状工具で沈線を描く肇工街タイプが分布するようになるが、この肇工街タイプは丹東地区では石仏山で見ることができる（図17-20）。石仏山は時期幅がある程度長いものと思われるが、東高台山タイプの偏堡類型土器は出土しておらず、折縁罐が主体的に見られ小珠山上層期併行期より古い土器は見られない。また同様の在り方を示すと考えられるのが平安北道（鴨緑江下流域）の双鶴里（都宥浩1960、李炳善1963、1965）である。ここでも折縁罐とともに偏堡類型の土器が出土しているが、偏堡類型の土器の主体は肇工街タイプである。したがって肇工街タイプは小珠山上層期に併行する可能性が高い。瀋陽地区では肇工街下層期の段階になっても折縁罐が見られないことは吉長地区同様地域差であると考えておきたい。

これとは異なり、平安北道（清川江流域）の堂山遺蹟上層（都宥浩1960；차달만1992）では東高台山タイプの偏堡類型の土器が出土している。従って、堂山上層は小珠山上層以前の段階で、呉家村期以降の段階（堂山下層が呉家村期併行であるため）、即ち三堂村1期と併行であることがわかる。また、堂山で東高台山タイプが出土することから東高台山タイプと肇工街タイプが単純に地域差ではないことがわかる。

その後、瀋陽地区では高台山文化が展開する。高台山文化は様々な研究者によって編年の細分化がなされてきたが（陳光1989；李晚鐘・藺新建1991；董新林1996など）、大枠では一致しているので、本稿では高台山Ⅰ組（双砬子2期、廟後山中層類型に併行）、高台山Ⅱ組（双砬子3期、廟後山上層早期類型に併行）という区分に従う。高台山Ⅰ組では縦位の橋状把手をもち刻目隆帯を頸部にもつ壺、無文の壺、圈足附鉢などがみられる。高台山Ⅱ組ではその組成を維持しながら、縦位の橋状把手のある甬、甌、碗などがみられ、特に壺の口縁下部に刻目隆帯もめぐらせるものは太子河上流

域の廟後山上層早期類型のものに類似する。

IV. 太子河上流域の編年

太子河上流域では新石器時代の遺蹟としては馬城子 B 洞下層、北甸 A 洞下層（遼寧省文物考古研究所ほか 1994）などが挙げられる。李恭篤は新石器時代を馬城子文化類型と設定し、青銅時代を廟後山文化類型と設定した（李恭篤 1989, 1992）。そして、馬城子文化類型のなかには偏壘類型の土器が認められ、瀋陽地区の肇工街下層や平安北道の双鶴里、堂山と対比している。

馬城子 B 洞下層や北甸 A 洞下層では、次に述べる丹東地区の後窪上層類型と通有の口縁部を空白に残し、胴部全面に弦文を施文したり、胴上中部に弦文、胴下部に点列文を施文する筒型罐が見られる（図 13-1～3）。胴上中部に斜線文を施し、胴下部に点列文を施す筒形罐（図 13-4）はその文様帯の共通性から弦文罐と同時期のものであると思われる。この段階を馬城子下層 1 期とする。細かい横走魚骨文や短斜線文を施文し、縦の棒状貼付文が付着する土器（図 13-6）がみられるが、このような沈線文と縦の棒状貼付文は遼東半島の呉家村期の土器に見られる特徴（図 10-11）で、この段階を馬城子下層 2 期とする。馬城子 B 洞下層や北甸 A 洞下層でも、以前、李恭篤が指摘したように偏壘類型の土器が見られる（図 13-7～14）。特に胴部に縦の隆起線を貼り付けた東高台山タイプの特徴を持つものが多く、瀋陽地区の東高台山 2 期、遼東半島の三堂村 1 期に併行するものと思われる。この段階を馬城子下層 3 期とする。次の段階が、折縁罐（図 13-15～17）がみられる段階である。北甸 A 洞下層では縦位の擦過状沈線を胴部に施した肇工街タイプの偏壘類型の土器（図 13-18）が出土しているが、瀋陽地区の項で検討したように丹東地区の石仏山に見られるように折縁罐と肇工街タイプの偏壘類型の土器が伴うことから、折縁罐と肇工街タイプ偏壘類型土器の段階として、馬城子下層 4 期と設定する。折縁罐は筆者分類Ⅱ類のみが見られ、遼東半島の小珠山上層期に併行するものと思われる。

青銅時代は、陳光や李恭篤らによって廟後山中層類型、廟後山上層類型早期、廟後山上層類型晚期と編年されている（陳光 1989；遼寧省文物考古研究所ほか 1994 など）。廟後山中層類型（図 13-20～23）では、馬城子 B 洞 M13 や M8 に見られるように腹が膨らみ口縁下部と胴部に隆帯（刻目含む）をめぐらせた直領罐、耳のついた罐、壺などがみられる。胴部に沈線文が刻まれるものもみとめられる。この他にも二重口縁で二重口縁下端部に刻みを持つ罐なども認められる。廟後山上層早期（図 13-28～34）では山城子 B 洞 M11 や M7 に見られるように、口縁下部に刻目隆帯がめぐる罐や鶏冠状の節状刻目隆帯がつく直領罐、二重口縁の碗、縦位の橋状把手がつく大型の壺や無文の壺がみられる。これらの特徴から陳光らは廟後山中層期を瀋陽地区の高台山Ⅰ組に、廟後山上層早期を高台山Ⅱ組と併行関係にあると想定している（陳光 1989）。

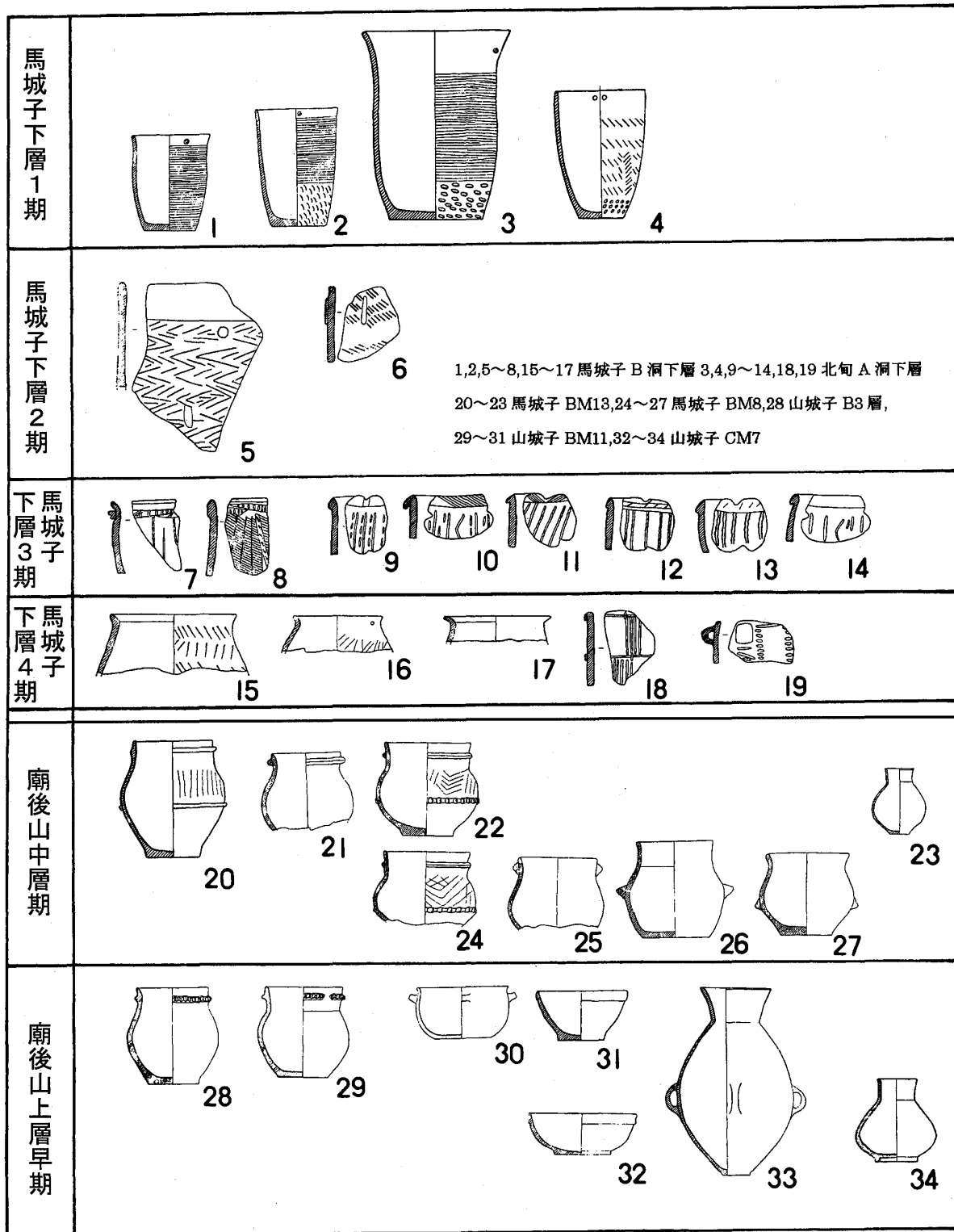


図13 太子河上流域土器編年図 (S = 1/10 破片は1/5)

V. 丹東地区の編年

許玉林と高洪珠は丹東地区の新石器時代編年を提示した（許玉林・高洪珠 1984）。ここでは丹東地区の新石器時代が4段階に編年され、遼東半島の変遷に合致した変遷観が示された。この時点では後窪上層文化（図 16-1～7）の位置付けがなされておらず、後に許玉林は後窪上層を小珠山中層の後続段階に位置づけた（許玉林 1989）。また馮恩学は郭家村3層に後窪上層を併行させる考えを示している（馮恩学 1991）。しかし、金鍾赫は後窪上層の次に堂山を置き、堂山では実質、呉家村期併行の土器を挙げていることから、呉家村期よりも後窪上層は先行すると考えている（金鍾赫 1992, 1993）。このときの金鍾赫の掲げた根拠は、堂山は後窪上層と横走魚骨文や深鉢といった器種が共通するものの、堂山はまた、より遅い時期の青燈邑との共通する要素があるので、後窪上層と青燈邑の間にはいるというものであった。また、宮本は後窪上層を小珠山下層と一部重なる可能性を残しておきながら、この地域の小珠山中層併行期が欠落する関係で、小珠山中層に併行させている（宮本 1995）。一方、金英熙は、北呉屯上層（許玉林ほか 1994）や美松里下層で之字文土器と小珠山中層・呉家村的な沈線文が共伴していると考え、これを之字文段階である小珠山下層期と呉家村期の過渡的な様相と把握し、連続性を認め、後窪上層が入る余地はなく、そして太子河流域の馬城子B洞下層や北甸A洞下層で後窪上層類型の土器が偏堡類型の土器と共伴する点を挙げ、必然的に呉家村期よりも後窪上層が後行するという許玉林らに近い考えを示している（金英熙 2003）。

このように丹東地区の新石器時代編年に関してはおおむね許玉林・高洪珠の見解で一致しているものの、後窪上層の位置付けおよび遼東半島との併行関係に関しては諸説あることがわかる。

金英熙が挙げた共伴関係に関しては、太子河上流域の項で述べたように、馬城子B洞下層・北甸A洞下層では小珠山中層期から上層期併行期に至る幅広い時期の土器が出土しており、単一時期の包含層と見なすことは難しい。また、北呉屯上層¹²⁾に関しては小珠山中層期と呉家村期の遺物がみられるが、他遺蹟では出土しない之字文施文土器が異質な存在である。混在の可能性が高いものと思われる。従って、北呉屯上層は小珠山下層期から呉家村期を包含する時期であると考えておきたい。美松里下層に関しても同様である。

以上を踏まえ、筆者の丹東地区の変遷観を以下に示す。

後窪下層段階に続く後窪上層段階では特徴的な弦文を施す深鉢・無文の壺・碗が見られる。これは多くの研究者が指摘するように馬城子B洞下層・北甸A洞下層のあり方と類似している。後窪上層では之字文が見られない点から小珠山下層期より遅い段階と併行関係にあるものと思われるが、弦文施文筒形罐が遼東半島の小珠山下層や上馬石下層で見られる弦文の施文された土器と類似していることが既に趙輝によって指摘されており（趙輝 1995）、宮本が一部は小珠山下層と併行する可能性があると考え（宮本 1995）のは理のないことではない。趙輝は後窪での下層と上層の排他的な出土状況から逆に遼東半島の小珠山下層の細分を試みている。しかし、趙輝が小珠山下層2期（後窪上層期併行）と小珠山中層期を同段階とする点はそれぞれの共伴関係が確認されないことから単



図14 北荘出土後窪上層系土器

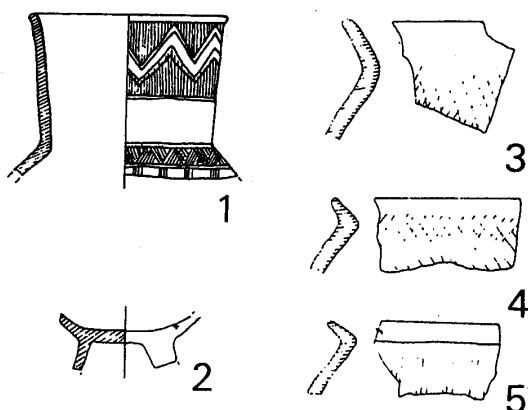


図15 窯南出土土器

後窪上層期							
閻坨子期						1~7 後窪上層 8~12 閻坨子	

図16 丹東地区土器編年図1 (S = 1/10 破片は1/5)

純には同意できない。後窪上層期の遼東半島での併行関係に関してはこのような問題点があるため筆者も明確にはできない。ただ、近年、膠東半島の北荘（侯建業 2006）でも後窪上層類型と関連があると思われる筒形罐が出土していることが明らかになり（図14）、遼東半島にも後窪上層類型の土器が存在していても不自然ではない。その場合、趙輝らが注目した小珠山下層や上馬石下層で出土した弦文施文筒形罐が有力候補になろう。丹東地区では呉家村期併行と考えられる細い沈線の短斜沈線文などは見られる一方、先に示した小珠山中層期の押引の短斜沈線文や押引と沈線の複合した文様（組合文1）が見られず、小珠山中層期と後窪上層期を地域差と考え、共に呉家村期に先行する段階ということ、暫定的に併行期であると考えておきたい。なお後窪上層類型は許玉林が指摘するように、鞍山・本溪・丹東・寛甸に分布し（許玉林 1987）、韓半島側では鴨緑江下流域のみに見られ、地域性の強い類型であろう。

後窪上層に続く段階は閻坨子（許玉林・高洪珠 1984）などに代表される段階である（図16-8~12）。この段階は朱延平が閻坨子の土器と北呉屯上層（許玉林ほか 1994）の土器を対比しているように（朱延平 1996）、横走魚骨文や斜格子文の沈線文系土器から遼東半島の呉家村期との関連が深く、併行関係にあるものと思われる。

閻坨子期に後続する東高台山タイプ偏堡類型の段階は現時点では丹東地区では明確に確認するのは難しい。しかし、太子河上流域・遼東半島・平安北道（鴨緑江下流域・清川江流域）に東高台山

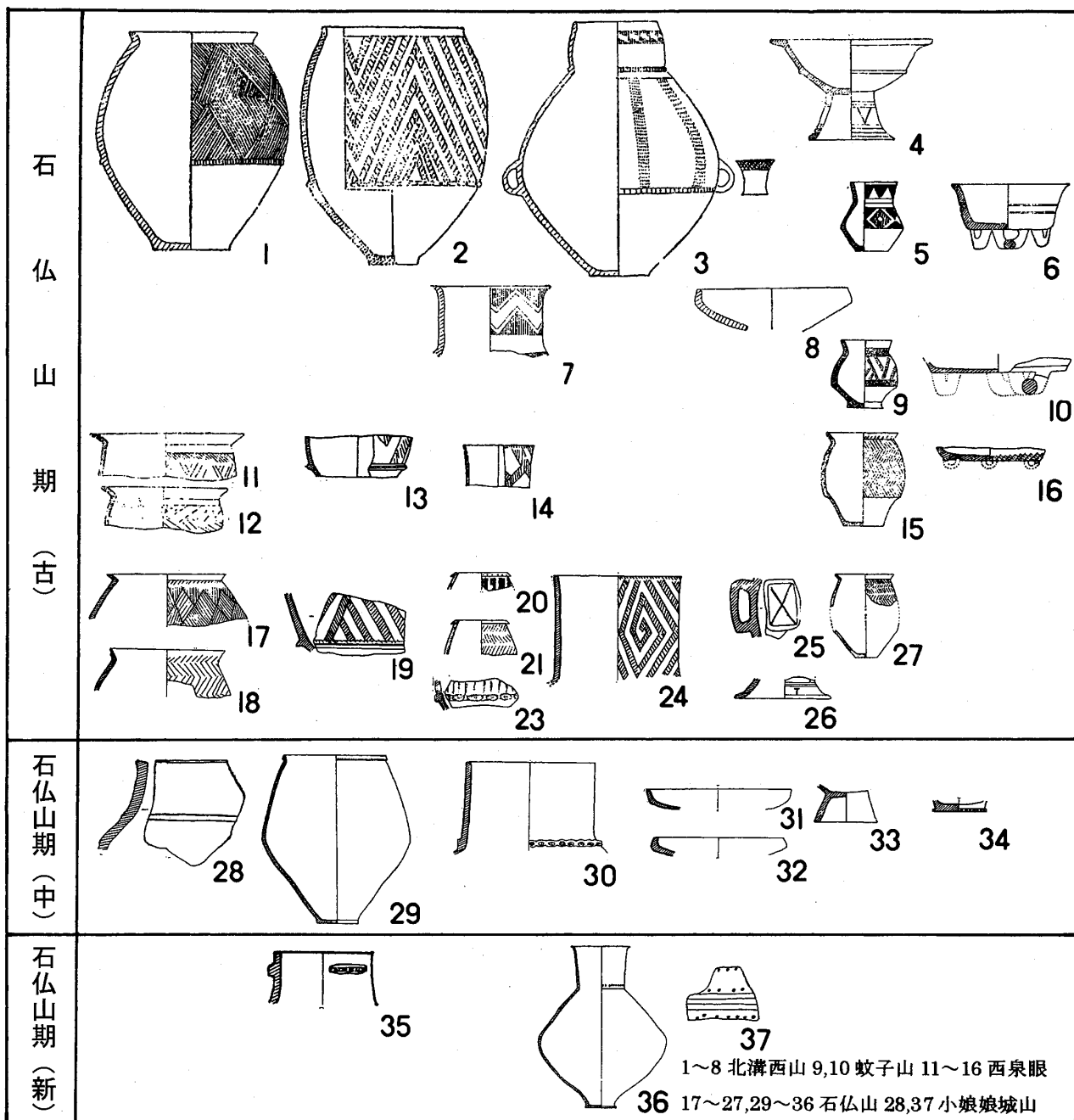


図17 丹東地区土器編年図2 (S = 1/10 破片は1/5)

タイプ偏壺類型は確認されているので、丹東地区にもこの段階があると考えておくほうが自然である。石仏山採集品（朱永剛 1993 の図 2-5）がこの段階に該当しよう。

続く段階は石仏山（許玉林 1990b）、蚊子山（許玉林・高洪珠 1984）、西泉眼（許玉林 1988）、北溝西山（許玉林・楊永芳 1992）の段階である（図 17-1～27）。ここでは、折縁罐、壺、豆、三環足器、碗などの器種組成が見られる。折縁罐・三環足器が見られることから遼東半島のおおむね小珠山上層期に併行する部分があるのは確実である。石仏山で見られる頸部に雷文など幾何文を施す大口高領壺（図 17-7, 24）などは、遼東半島では庄河市の窯南（王嗣洲・金志偉 1997）において横走魚

骨文が施文された折縁罐と共に出土し(図15)、また、平安北道(鴨緑江下流域)では青燈邑で横走魚骨文など幾何文が施文された折縁罐Ⅱ類とともに出土しており、これと関係があるものと思われる。遼東半島では双砬子1期には折縁罐が急減し、広口壺が主体となるが、後述するように鴨緑江下流域では双砬子1期後半まで折縁罐が残るのは確実なので、小珠山上層期から双砬子1期と考えておきたい。遼東半島でも東側で丹東地区に近接した窯南の場合、丹東地区と同様に双砬子1期併行でも折縁罐が残る可能性がある。王嗣洲は窯南の大口高領壺を北溝西山から出土した大口高領壺に類例を求めており(王嗣洲2000)、頸部に雷文系の幾何文を施文する点などから、筆者としても西山や石仏山に類例を求め、遼東半島よりむしろ丹東地区を中心に分布するものと把握したい。折縁罐に関しては、筆者が既に指摘したように(古澤2005)遼東半島のものと若干差異があり(折縁罐Ⅱ類、および胴下部に隆帯を持つなど)在地的な様相を示している。また三環足器には弦文や無文のものがみられ遼東半島のものと通有な特徴を持つものがある一方、西泉眼では三環足器の胴部に斜格子文が施文されるものが認められ(図17-16)、このような斜格子文が施文された三環足器は遼東半島には見られず、在地的な変容を示すものとして注目される。器種の組成としては遼東半島との共通性が高いものの、在地的な様相も強いと判断される¹³⁾。

石仏山の段階はある程度時期幅があるものと思われる。石仏山では上述のようにおおむね小珠山上層期から双砬子1期に併行する段階があり、この段階を石仏山期(古)と設定する。肇工街タイプの偏堡類型土器が出土する(図17-20)ことから瀋陽地区の肇工街下層期に併行するものであると思われる。朱永剛も肇工街出土偏堡類型土器と石仏山出土土器を同一時期と見ている(朱永剛1993)。北溝西山や西泉眼が小珠山上層期併行の単純段階を示すようにも感じられるが、ここでも頸部に幾何学文をもつ大口高領壺が出土している(図17-7,14)ので、一応、石仏山期(古)と広く考えておくほうが穏当かと思われる。石仏山から出土したT字の透窓がある豆脚部(図17-26)は類例が遼東半島の小珠山上層期と双砬子1期の中間的な於家村下層期の単純な様相を示す高麗城山(許明綱・劉俊勇1981)(図11-28)において出土しているので石仏山期(古)に属するのであろう。

石仏山ではこのほかに底部の縁に刻目のある碗(図17-34)や圈足附土器(図17-33)が出土しており、これらは北溝西山など石仏山期(古)の単純な様相を示す遺蹟からは出土しないので差引き的に分離される。後述するように新岩里第3地点第1文化層の組成に近く、この段階を石仏山期(中)とする。金鍾赫は石仏山の底部の縁に刻目のある碗や圈足附土器を青燈邑より遅い、新岩里第3地点第1文化層と併行であると想定している(金鍾赫1991,1992,1993)。この段階には圈足附き土器や附加堆文口縁などが出土する大頂山(許玉林・高洪珠1984)などもこの時期であると想定され、許玉林と高洪珠の丹東地区編年4期(許玉林・高洪珠1984)の一部が該当する。そして、この段階の遼東半島との併行関係としては、圈足附土器、突出した底部縁に刻目を持つ碗などの組成から先述した単砬子包含層の段階(図9-7,8)、即ち双砬子1期後半が想定される。そして、口唇部を斜めに面取りし、直立ないし内湾する口縁部で平らな杯部をもつ豆(図17-31,32)も石仏山期(中)に該当し、同様の資料が単砬子包含層で出土している(図9-5)。この豆は石仏山期(古)

に編年される北溝西山の直立する口縁の豆（図 17-8）の系譜を引くものと想定され、丹東地区に主体的に分布する豆と想定される。従って、遼東半島では単砒子包含層以外でこのような豆が出土せず、稀であるのは主体的に分布するのが丹東地区であるという説明が可能かもしれない。

そして、石仏山ではさらに太子河上流域の廟後山上層早期や平安北道（鴨緑江下流域）の新岩里第 3 地点第 2 文化層（新岩里Ⅱ期）のように鶏冠状の隆帯（節帯状隆帯）の付いた罐（図 17-35）や頸部に点列文のある壺（図 17-36）が出土しておりこの段階を石仏山期（新）とする。金鍾赫は小娘娘城山の沈線と点列文が施文される土器（図 17-37）を新岩里第 3 地点第 1 文化層と対比しているが（金鍾赫 1992, 1993）、同様の土器は新岩里第 3 地点第 2 文化層で出土している（図 19-60, 61）ことから石仏山期（新）に属する可能性がある。但し、小娘娘城山出土の下端部に刻目がある二重口縁土器は新岩里第 3 地点第 1 文化層でも同第 2 文化層でも出土していることから金鍾赫の指摘のように小娘娘城山でも新岩里第 3 地点第 1 文化層に併行する時期の資料も含まれる可能性がある。石仏山では北溝西山や西泉眼で出土しない無文の頸部で頸部と胴部の境界に刻目隆帯を持つ大口高領壺（図 17-30）が出土している。このような土器は平安北道（鴨緑江下流域）では青燈邑や龍淵里で出土しており、より遅い時期の新岩里第 3 地点第 2 文化層でも出土する。従って、この土器は石仏山期（古）～（新）のどの段階のものか判断できないが、そのいずれかの段階のものであることは疑いない。

このように石仏山を大きく 3 期に分期し、遼東半島との関係を想定した場合、中国側の想定（許玉林 1990）のように、石仏山を単純に丹東編年 3 期（許玉林・高洪珠 1984）とし、小珠山上層期に相当させるだけでは不十分である。金鍾赫は平安北道（鴨緑江下流域）側の編年を考慮しているため、双砒子 1 期に併行する資料が含まれることを主張しており（金鍾赫 1991）、遼東半島の単砒子包含層などをもとに双砒子 1 期に併行する時期があることを示した筆者の見解に近く、賛意を表するものである。

VI. 平安北道（鴨緑江下流域）の編年

平安北道（鴨緑江下流域）に所在する盤弓里（徐国泰・지화산 1994, 1995, 2003）では後窪上層類型に類似した資料が発見されている（図 18-1～3）。盤弓里では折縁罐なども出土しているため、より新しい時期のものも混在しているが、丹東地区の後窪上層や太子河上流域の馬城子 B 洞・北甸 A 洞下層などで出土している胴上部に弦文を施し、その後、斜線を入れる土器や胴上部に弦文を施文し、胴下部に点列文を施す土器が出土している。このことから平安北道においても後窪上層タイプの土器が存在していたことがわかる。丹東地区の後窪上層では閻陀子期の土器が出土していない以上、呉家村期に先行する段階のものであると考えられ、この段階を盤弓里 1 期とする。

これに次ぐ段階が美松里下層（金用珩 1961 a・b, 1963 a・b）の一部の土器である。美松里下層では之字文の土器や組帯文の土器が出土しているが、後窪下層期や小珠山下層期に併行するもの

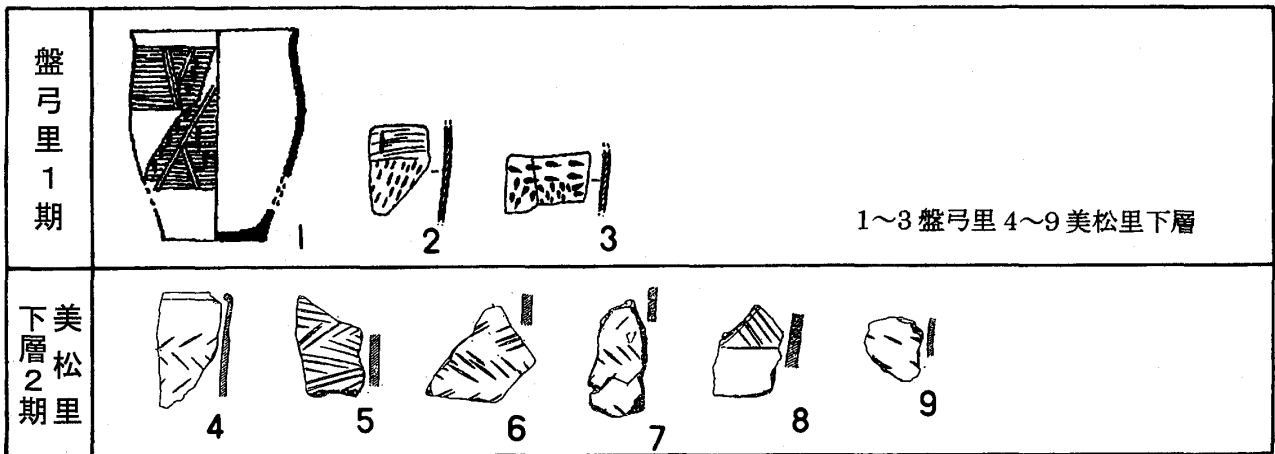


図18 平安北道（鴨緑江下流域）土器編年図1（S = 1/10 破片は 1/5）

で、これらを除外した一群の土器の段階である。沈線文系の土器を美松里下層2期、之字文や組帯文が施文された土器を美松里下層1期と便宜上、区分する。美松里下層2期の土器は閻坨子期—呉家村期に通有の特徴を持った土器で、当該期に併行するものと思われる（図18-4～9）。

双鶴里（都宥浩1960；李炳善1963）では偏堡類型の土器と折縁罐が出土している。偏堡類型の土器の中では東高台山タイプのもの（図19-1）と肇工街タイプのもの（図19-6）の2者が見られる。丹東地区の石仏山期（古）の様相を参考にすると折縁罐（図19-2～5）は肇工街タイプのものに伴うであろう。従って、東高台山に併行する時期と、肇工街に併行する時期の2時期に分離されることが想定される。前者を双鶴里1期、後者を双鶴里2期とする。そして、折縁罐の存在から双鶴里2期は遼東半島の小珠山上層期に併行するものと想定される。なお、折縁罐は筆者分類の折縁罐Ⅱ類のみが出土している。そして、折縁罐Ⅱ類は受容するものの、丹東地区ではみられた三環足器は受容されない。盤弓里の一部の遺物も偏堡類型に特徴的な壺（図19-7）からこの段階に属すると想定される。また同じ盤弓里から出土した点列を縦位に配する文様の深鉢（図19-8,9）は鴨緑江上流域の土城里期の土器（図20-8）と関係があるかもしれない。双鶴里で出土した特徴的な壺（図19-11）は胴部隆帯の下に斜格子文が施文され、その下部に雷文が施文される。同様の文様構成を持つものは双鶴里出土の折縁罐（図19-5）にもみられ、双鶴里2期の所産であると考えられる。

青燈邑（新岩里第1地点）第1文化層（李淳鎮1965）は、二重口縁土器の出土がない点が双鶴里との差異である。器種としては各種沈線幾何文が施文された折縁罐Ⅱ類のほか、独特な頸部に幾何学的な文様をもつ大口高領壺、頸部に刻目隆帯を持つ無文の大口高領壺が出土しており、同様の在り方は龍淵里でもみられる（図19-12～35）。これらの諸特徴から双鶴里より、やや遅い段階のもので、遼東半島の双砬子1期に併行すると考えておきたい。雷文土器の変遷から姜仲光や白弘基も同様に双鶴里より青燈邑が遅れるとしている（姜仲光1975；白弘基1993）。ただし、双鶴里と青燈邑ではほぼ同様の文様構成を持つ折縁罐が確認されており（図19-5と図19-13）、それぞれの遺蹟で共存する時期があったことを示唆する。

さて、近年、安在皓や千羨幸は青燈邑の組成の中で沈線と浮文¹⁴⁾が施された土器（図19-22）

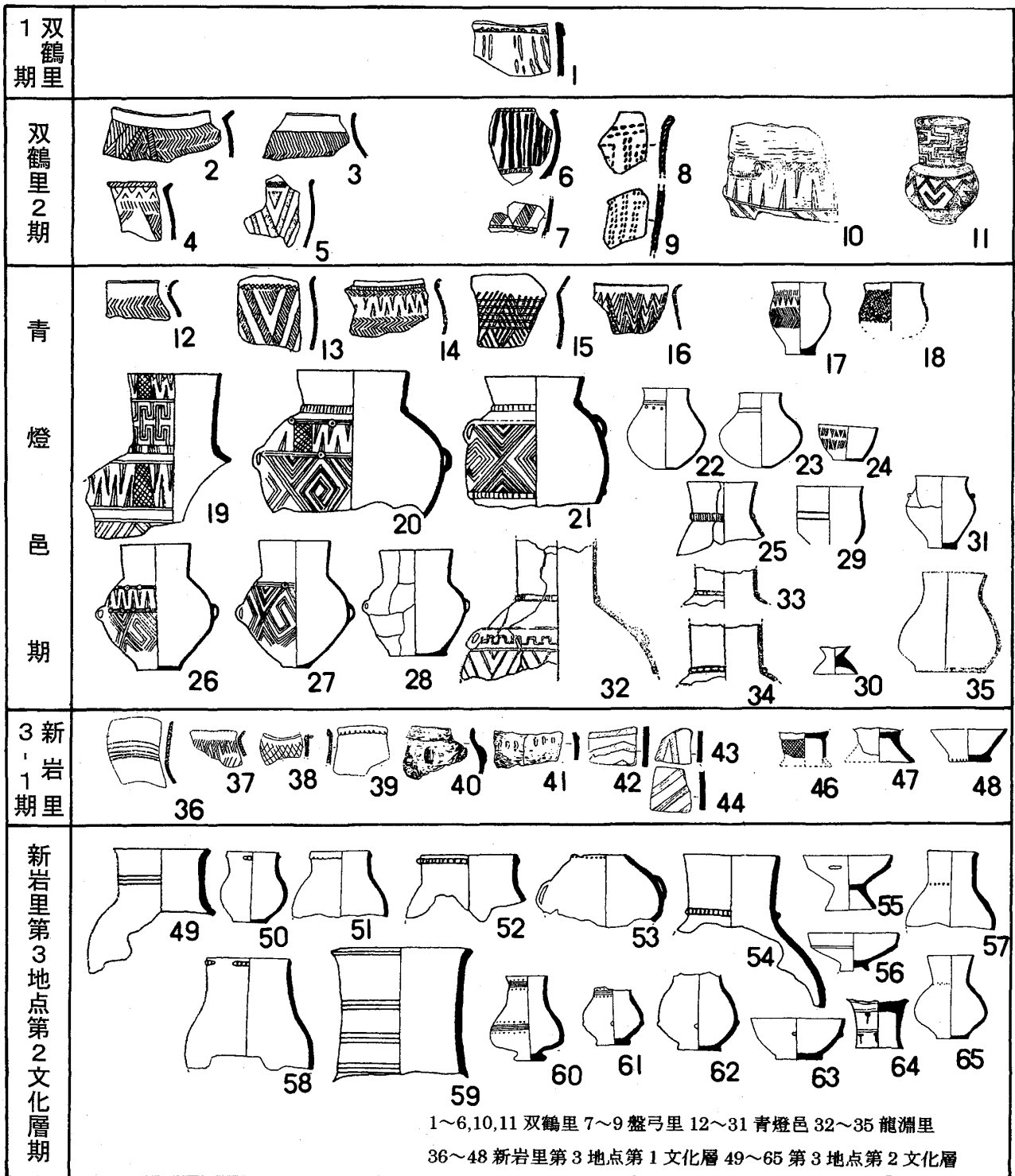


図19 平安北道（鴨緑江下流域）土器編年図2 (S=1/10)

は新岩里第3地点第2文化層期との類似性が高く、これをその他の青燈邑の土器と分離して新岩里I期新と定義し、新岩里第3地点第2文化層期と併行させるという見解を示した（安在皓・千羨幸2004；千羨幸2005）。また、この土器が胴部と頸部の境界が明確な新岩里I期の幾何文が施文される大口高領壺とは異なり、頸部と胴部の境界が明確でなくなっただらかな点を挙げ、この想定を補強し

ている。しかしこの土器（図 19-22）こそが、従来の研究者が、青燈邑期を双砬子 1 期と併行関係にあるという根拠に用いてきた土器である。北韓の研究者は双砬子遺蹟第 1 文化層から出土した同様の沈線が施文され、浮文が付された壺（図 11-32）と対比し、青燈邑期は双砬子 1 期とほぼ同時期か、青燈邑期には彩絵陶が見られないので双砬子 1 期より若干早いと見ている（社会科学院考古学研究所・歴史研究所 1969）。大貫も同様の見解をとり、青燈邑期の沈線文の壺を双砬子 1 期や単砬子包含層の壺（図 9-3）に対比させている（小川 1982）。この沈線文の壺は新岩里第 3 地点第 2 文化層期でも全く類例はなく、勿論、遼東半島の双砬子 3 期にもそのような土器は確認できない。そして、先に述べたように青燈邑期はおおむね双砬子 1 期に併行するので、双砬子 1 期に類例を探すことのできる沈線文の壺も、同じ青燈邑期の組成として全く問題はない。従って、安在皓や千羨幸の青燈邑期の分期は首肯し得えず、青燈邑の資料は従来からの考えのようにおおむね遼東半島の双砬子 1 期に併行するものと考えられる。ただし、折縁罐が相当量存在する点、折縁罐の中に前段階の双鶴里と同じ文様構成の資料が存在する点、及び先に触れた郭家村の小珠山上層期の蓋（図 8-2）と類似している蓋ないし杯（図 11-23）が出土している洪子東西大礁貝丘では緩く外反する口縁を持ち胴部に斜格子文が施文される鉢（図 11-22）が出土しているが、同様の鉢が青燈邑でも出土している（図 19-18）ので青燈邑の一部の遺物は遼東半島の小珠山上層期に併行するものもあるということを指摘しておきたい。

続く段階が、新岩里第 3 地点第 1 文化層の段階である（金用珩・李順鎮 1966；社会科学院考古学研究所・歴史研究所 1969）。ここでは、口唇に刻目をもち胴部に三角集線文・横走魚骨文を施文する折縁罐Ⅱ類、頸部に数条の沈線が施された広口壺、下端部に刻目を有する二重口縁、底部の縁に刻目を有する碗、そして彩絵陶などが出土している。斜格子文施文や無文の圈足附土器が特徴的である。新岩里第 3 地点第 1 文化層が青燈邑と土器の組成が異なり、青燈邑より時期的に遅れるであろうことは、既に 1969 年に北韓の研究者が指摘している（社会科学院考古学研究所・歴史研究所 1969）。また、大貫や宮本も同様の見解を示している（大貫 1989；宮本 1991）。特に、圈足附土器が前段階の青燈邑のものとは形態が異なる点は重要な差異である。新岩里第 4 地点第 1 地点は、姜仲光の簡報によれば、新岩里第 3 地点第 1 文化層に相当する内容を持つようである（姜仲光 1979）。ここでも、圈足附土器が相当量出土しており、この文化層の特徴の一つであるという。

それでは、新岩里第 3 地点第 1 文化層は遼東半島のどの段階に併行するのであろうか。彩絵陶に注目した北韓の研究者は同様に彩絵陶が出土する双砬子 1 期や単砬子彩絵陶層に併行関係を置いている（社会科学院考古学研究所・歴史研究所 1969）。特に単砬子包含層を双砬子 1 期におき、新岩里第 3 地点第 1 文化層がそれと併行にあることを徐国泰は明確に示している（徐国泰 1986）。大貫は彩絵陶が双砬子 3 期まで残りうることから、双砬子 1 期と限定せず、第 3 地点第 1 文化層出土の縦位の貼付文（図 19-41）を羊頭窪（双砬子 3 期）のものと同じ視し、双砬子 3 期においている。連動して後続する新岩里第 3 地点第 2 文化層期を双砬子 3 期ないし多少遅れるとした（小川 1982, 大貫 1989）。宮本は彩絵陶に関しては大貫と同様の考えを示し、新岩里第 3 地点第 1 文化層を双砬

子1期から双砦子3期前期段階に当たるものと考えたが(宮本1985)、後に併行期を双砦子2期に限定した(宮本1991)。

さて、ここで、注目されるのが、新岩里第3地点第1文化層と、先に触れた遼東半島単砦子包含層との類似である。単砦子包含層でも同様に圈足附土器(図19-47と図9-7)、底部に刻目を持つ碗(図19-48と図9-8)が出土している。そして、先述のように単砦子包含層の中で先に例示した遺物は双砦子1期の遅い段階に該当し、新岩里第3地点第1文化層は同様の土器組成をもつ丹東地区の石仏山期(中)を介して、遼東半島の双砦子1期後半期に併行関係が求められる。このような併行関係を想定した場合、新岩里第3地点第1文化層では折縁罐Ⅱ類が出土している点が注目される。遼東半島では先述のように折縁罐が双砦子1期ではほとんど見られず、みられても頸部の傾きが直線化しているが、平安北道(鴨緑江下流域)では断面「く」形の折縁罐Ⅱ類が依然残存するという地域性を看取することができる。しかし、平安北道(鴨緑江下流域)でも、双鶴里2期や青燈邑期の折縁罐と比較すると新岩里第3地点第1文化層の折縁罐の口縁の傾きは直立化しており、遼東半島と連動した変遷過程を示す。

また先に青燈邑期が小珠山上層期から双砦子1期に併行するであろうことを述べたが、大口高領壺が出土せず、折縁罐が出土する双鶴里2期は石仏山期(古)-小珠山上層期に併行し、新岩里第3地点第1文化層は石仏山期(中)-双砦子1期後半に併行すると考えた場合、その中間段階の青燈邑期はやはり双砦子1期におおむね併行するということを傍証する。

新岩里第3地点第1文化層は相対的に遺物量が少なく、頸部に刻目隆帯がめぐる大口高領壺の出土はないものの、単砦子包含層にはみられる(図9-9)ことから、この段階にあったとしても不自然ではない。このように考えた場合、先述した青燈邑期の青燈邑や龍淵里で見られる頸部刻目隆帯附大口高領壺(図19-25, 33, 34)は混在ではなく本来の在り方を示し、さらに後の新岩里第3地点第2文化層(新岩里Ⅱ)で出土する頸部刻目隆帯附大口高領壺(図19-54)に系譜的に繋がっていくものであろうと考えられる。

姜仲光によれば、新岩里第4地点第1文化層(第4地点2区下層)は新岩里第3地点第1文化層とほぼ同様の文化内容を持つという(姜仲光1979)。そして新岩里第4地点第2文化層(第4地点1区下層)がこれに後続し、より上層の新岩里第4地点第3文化層(第4地点1,2区上層)は新岩里第3地点第2文化層と同様の組成をもつという。つまり、新岩里第4地点第2文化層は新岩里第3地点第1文化層と同第2文化層の中間の時期に属するという。新岩里第4地点第2文化層の内容は図面が公表されていないのでよくわからないが、有頸で圈足のつく胴部の膨らんだ壺が典型的であるという。そして、総数160点あまりの底部のうち、圈足をもたない底部はわずか15%未満であり、残りは圈足附であるという(姜仲光1979)。この多くの圈足付き土器の存在は同様に圈足附土器が一般的になる新岩里第3地点第1文化層や若干数圈足附土器が存在する同第2文化層と近い時期であることを示唆し、姜仲光の想定を正しいものとして考えておく。遼東半島の双砦子2期文化は山東岳石文化との関連性が深い関係で、分布が狭く、丹東地区や平安北道(鴨緑江下流域)との併行

関係はよくわからない。後続する新岩里第3地点第2文化層が双砦子3期に併行し、先述のように第3地点第1文化層が双砦子1期後半に併行することを踏まえ、一応、第4地点第2文化層を双砦子2期併行期と考えておくが、確証はない。

新岩里第3地点第2文化層（金用珩・李淳鎮1966；新義州歴史博物館1967）は従来から多くの研究者が述べるように遼東半島の双砦子3期（特に羊頭窪）に併行する。北韓の研究者は平行沈線と点列を配する文様（図19-60, 61）や脚部（図19-64）などをその根拠にしている（社会科学院考古学研究所・歴史研究所1969）。また、宮本は当初、「上馬石A地点下層」という段階に併行させていたが（宮本1985）、口縁刻目隆帯附壺や口縁に4個の突起をつける壺から陳光編年（陳光1989）の太子河上流域の廟後山上層早期や瀋陽地区の高台山Ⅱ組に併行させており、遼東半島の羊頭窪段階（双砦子3期前期段階）に併行関係を求めるようになった（宮本1991）。先に新岩里第3地点第2文化層期を双砦子3期より若干遅らせて考える考え方（小川1982；大貫1989）があったことを示したが、筆者が述べたように新岩里第3地点第1文化層が双砦子1期後半に併行関係が求められる以上、双砦子3期より若干でも遅らせる必要はもはやない¹⁵⁾。

VII. 鴨緑江上流域

本地域では新石器時代の遺蹟としては土城里（李炳善1961；鄭燦永1983）、長城里（金鍾赫1961）、腰段（陳大為1960）、江口村（劉法祥1960）、五女山城48号住居址（遼寧省文物考古研究所2004）などがみられる。これらの遺蹟の相対年代は研究者ごとに異なる。

北韓では土城里2号住居址の土器を堂山や西浦項4期の段階に併行関係を想定している（社会科学院考古学研究所1977；金用珩1979；社会科学院歴史研究所1979；社会科学院考古学研究所・歴史研究所1991）。金用珩は土城里で出土した雷文土器と農圃遺蹟の雷文土器の類似をもとに西浦項4期に併行関係を求めた（金用珩1979）。また、北韓では土城里は鴨緑江上流域ではあるが、基本的に西浦項を中心とする東北韓の枠組みの中で把握されている。

一方、宮本は当時の資料上の制約から鴨緑江下流域と上流域を同一の地域圏として扱い、土城里2号住居址にみられる横走魚骨文の土器を遼東半島の小珠山中層に対比し、堂山下層の前段階にしている（宮本1985）。その根拠として土器の胎土に滑石・石綿を含んでいる点を挙げている。北韓の研究者が雷文土器をもとに土城里を新しい段階にしている点について、2号住居址の遺物と雷文土器には一括性はないと判断している。白弘基は宮本の見解に同意しつつ、土城里の沈線文土器を後窪や大崗の資料と類似するとし、美松里下層の伝統を維持しており、美松里下層の直後に年代的に位置づけられるとした（白弘基1993）。

土城里の資料を宮本が想定するように遼東半島の土器との関連で考えてよいのかということに関しては検討の余地がある。土城里では2号住居址を含め大量の黒曜石製石器が出土している。黒曜石製石器は鴨緑江下流域では見られず、勿論、遼東半島でも見られない。黒曜石製石器はむしろ、

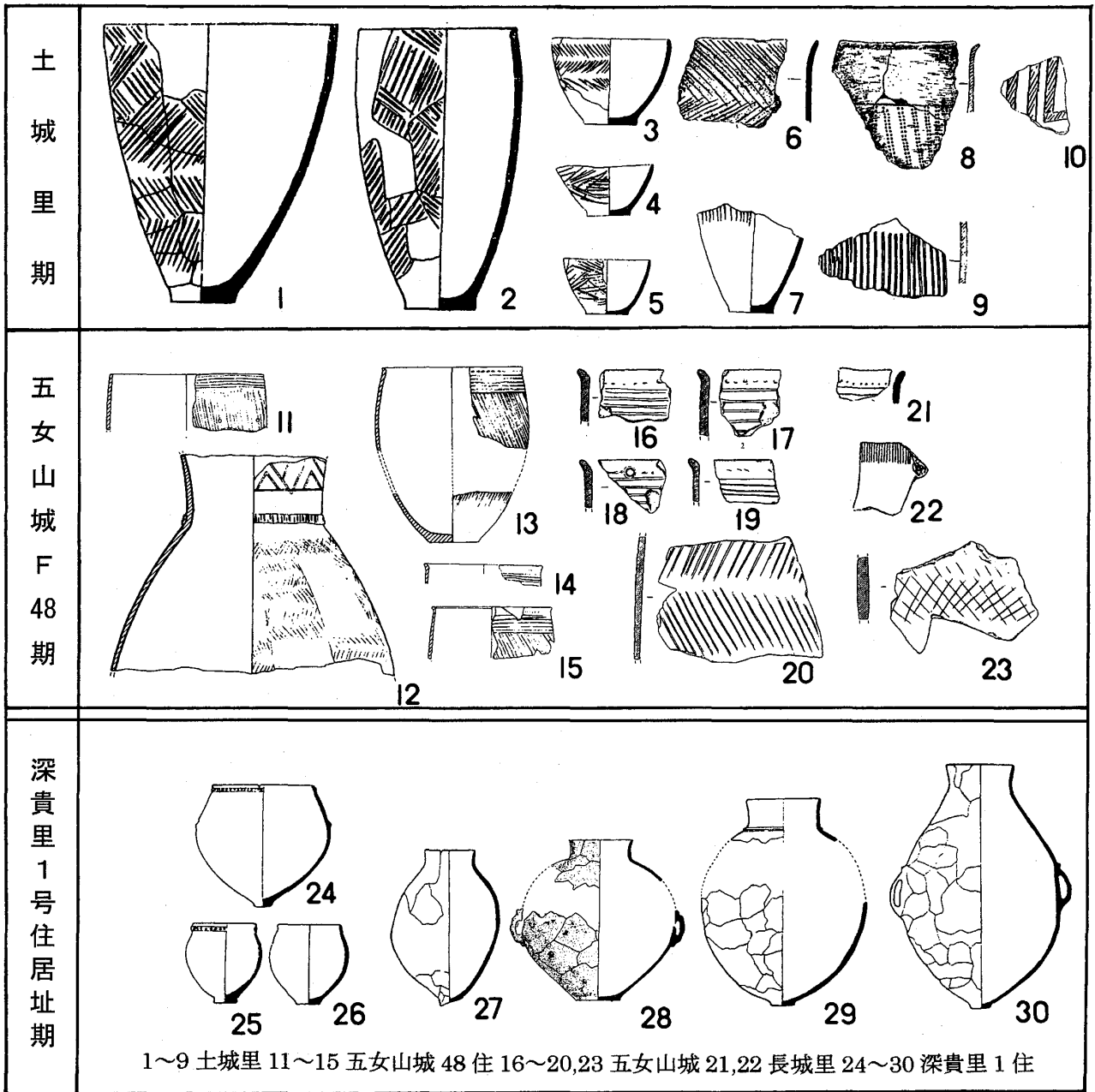


図 20 鴨緑江上流域土器編年図 (S = 1/10 破片は 1/5 24 ~ 30 は 1/20)

豆満江流域の西浦項 3・4 期，牡丹江流域の鶯歌嶺下層期・西安村東早期遺存および南沿海州のザイサノフカ文化新段階¹⁶⁾にみられる。また，土城里で出土している凸形，台形，饅頭形の土製紡錘車の組成は，以前，筆者が指摘したようにザイサノフカ文化新段階併行期の豆満江流域・牡丹江流域・南沿海州の組成であり，鴨緑江下流域や遼東半島の組成ではない（古澤 2006b, Furusawa 2007）。このような観点からみると土城里は文化総体としては豆満江流域・牡丹江流域・南沿海州と列なる一連の西浦項 3・4 期 - ザイサノフカ文化新段階群の色調が強く，北韓の研究者のように土城里を東北韓の文化との関連で把握する見解には理がある。土器のみが宮本のように遼東半島との共通する様相であると考えるのは不自然である。そして，併行関係上，小珠山中層期より遅れる

西浦項3・4期-ザイサノフカ文化新段階にも土城里2号住居址と同様の横走魚骨文が施文された平底の深鉢がみとめられるため、宮本の想定のように土城里2号住居址の土器を遼東半島小珠山中層期の土器との関連を想定し、堂山下層を遡る古い段階に年代づける必要性はない。なお、土器の胎土に滑石を混入するという点に関しては西浦項3・4期-ザイサノフカ文化新段階には認められないものの、遼東半島でも小珠山下層期には滑石を混入するものがほとんどであるが小珠山中層期にはほとんど認められず、双方に滑石混入土器が一般的ではない以上、系譜および年代を決定する根拠にはならない。土器胎土に滑石を混入するのは鴨緑江上流域の地域色である可能性がある。

土城里の年代的位置付けを考究する上で重要なのが、五女山城48号住居址を中心とする資料（遼寧省文物考古研究所2004）である。五女山城48号住居址では、口縁部文様帯に点列を持ち、口縁下部に横線、そして胴部に斜線が施される筒形罐（図20-13～19）や頸部に刻目突帯を有する大型の壺（図20-12）が出土している。この内、口縁に点列を持ち胴部に横線と斜線を持つ罐は土城里では一点も認められず、土城里と五女山城48号住居址には時期差にあることをしている。また、この土器は周辺地域ではこれまでのところ全く類例がないが、中国遼寧省桓仁の五女山城以外では北韓慈江道の長城里遺蹟でも確認され（図20-21）、鴨緑江上流域の独自性を示している。問題となる五女山城48号住居址の相対年代を決定する上で、重要なのが頸部に刻目突帯をめぐらせ、頸部に退化した雷文¹⁷⁾、胴部に横走魚骨文を施す大型の壺（図20-12）である。このような器種は周辺地域では鴨緑江下流域の青燈邑期や丹東地区の石仏山期（古）に初めてみられるもので、それ以前の段階にはみられず、五女山城48号住居址は鴨緑江下流域の青燈邑期や丹東地区の石仏山期（古）に併行関係を求めることができると想定される。ただし、鴨緑江下流域や丹東地区では頸部に刻目突帯を持つ大口高領壺の胴部に横走魚骨文を持つ例は皆無であり、これは鴨緑江上流域の地域性を示すものと思われる。

この五女山城では48号住居址以外でも新石器時代の土器として横走魚骨文や斜格子文の施された罐の破片などがみられる。そして、五女山城48号住居址で出土した大型の壺の胴部にも同様の技法の横走魚骨文が施文されている。これらの横走魚骨文を子細にみると、狭い間隔で細く施文されているものが大部分であり（図20-12, 20）、中には多歯具で施文されているものも認められる。このような特徴は土城里2号住居址の横走魚骨文（図20-1, 6）と同様の特徴で、西の小珠山中層文化群や東のザイサノフカ文化群にもみられない地域的な特徴である。そして、このような特徴が土城里2号住居址資料と五女山城48号住居址資料の双方に認められることは土城里2号住居址の土器が五女山城48号住居址の土器の年代からそれほど隔てられた段階の土器ではないということを示すと思われる。従って、筆者としては土城里2号住居址を五女山城48号住居址の直前の段階におき、鴨緑江下流域の双鶴里期に併行する段階と考えておきたい。宮本が一括性を否定した土城里で出土する雷文土器（図20-10）は鴨緑江下流域の双鶴里2期の雷文との関連を想定する考え方と西浦項4期-ザイサノフカ文化新段階の沈線文土器に伴う雷文との関連を想定する考え方の2通りの考え方が可能であるが、併行関係上からはどちらの考え方も成立しうるので、断定できない。

次の段階は青銅器時代前期の深貴里1号住居址（鄭燦永 1961, 1983）の段階である（図 20-24～30）。底径が小さく腹が膨らむ甕で口縁下部に刻目突帯がめぐる土器や把手の付く大型の壺が現れる。北韓では黄基徳らの見解に見られるように土器や住居址の形態から公貴里の段階の次に深貴里を編年している（社会科学院考古学研究所 1977, 黄基徳 1984）。しかし、次の深貴里2号住居址への連続性からは後藤の見解（後藤 1971）が示すように深貴里1号住居址を最古段階と見たほうが穏当であろう。また遼寧省桓仁の大梨樹溝墓（齊俊 1991；梁志龍 1991）でも深貴里1号住居址に近い組成を看取できる。この段階は後藤が述べるように鴨緑江下流域の新岩里第3地点第2文化層との関連が強いものと想定され（後藤 1971）、また、細部の形態は異なるが、甕と大形の壺というセットは太子河上流域の廟後山上層早期と共通し、関連を想定できる。

従って、鴨緑江上流域においては新石器時代の土城里期では東の西浦項-ザイサノフカ文化群との関連を持ちながら独自色を持っており、次の五女山城48号住居址期には、独自性を維持しつつも西の鴨緑江下流域の影響を徐々に受けはじめ、深貴里1号住居址期には鴨緑江下流域や丹東地区・太子河上流域の影響を受けるようになるというように結びつく地域が変化していく様相を看取することができる。

VIII. 韓半島と遼東地域の先史土器を対比させる従来の試図とその問題点

韓半島丸底土器と極東平底土器の相対編年の対比は北韓の研究者が継続的に行ってきた研究主題である。金用珩は胎土に滑石を混入する点、直立口縁、三角集線文などの点から沙泡子（三宅 1933, 1936, 1975）（後に小珠山下層期と設定される段階）と金灘里1文化層を併行にあると考え、胎土に滑石を混入しない点と短斜沈線文が共通する点から吳家村・堂山と金灘里2文化層を併行関係においた（金用珩 1966）。その後の「紀元前千年紀前半期の古朝鮮文化」（社会科学院考古学研究所・歴史学研究所 1969）でもほぼ同様の見解が示され、それぞれを「金灘里第1文化層類型」、「金灘里第2文化層類型」と規定している。

しかし、その後、北韓側は併行関係についての見解を大きく変える。金用珩が1990年に発表した著書（金用珩 1990）では弓山2, 3期が小珠山中層に併行し、弓山4期が小珠山上層に併行するとしている。その根拠として、小珠山中層で出土する彩陶に見られる渦文の文様（図 10-7）が西浦項3期の渦文土器および弓山2期・3期の点列波状文と関連があるという点を挙げている。『朝鮮全史1原始篇』第2版（社会科学院歴史研究所・考古学研究所 1991）でも同様の見解が提示されている。

このような研究は北韓以外でも追及されてきた。宮本や大貫は南京2期（弓山5期）に出現する壺（図 23-25）を郭家村上層で出土した壺（図 11-9）と対比させ、南京2期が遼東半島の小珠山上層期に併行することを立証した（宮本 1986, 大貫 1989）。この壺は在地の系譜からその出現が追えない点、隆起線文と沈線という差異はあるものの文様モチーフは共通する点から妥当なものであ

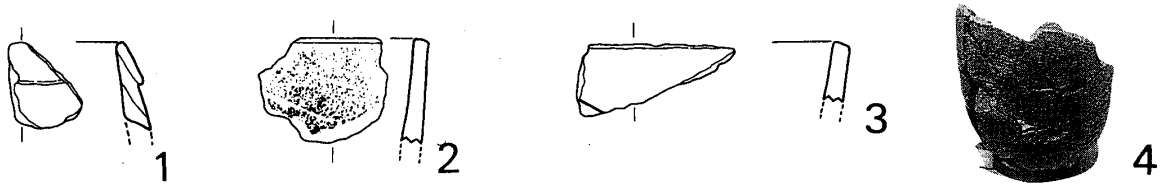


図21 滑石混入土器 (1~3ティサルマク 4南北洞 S=1/4)

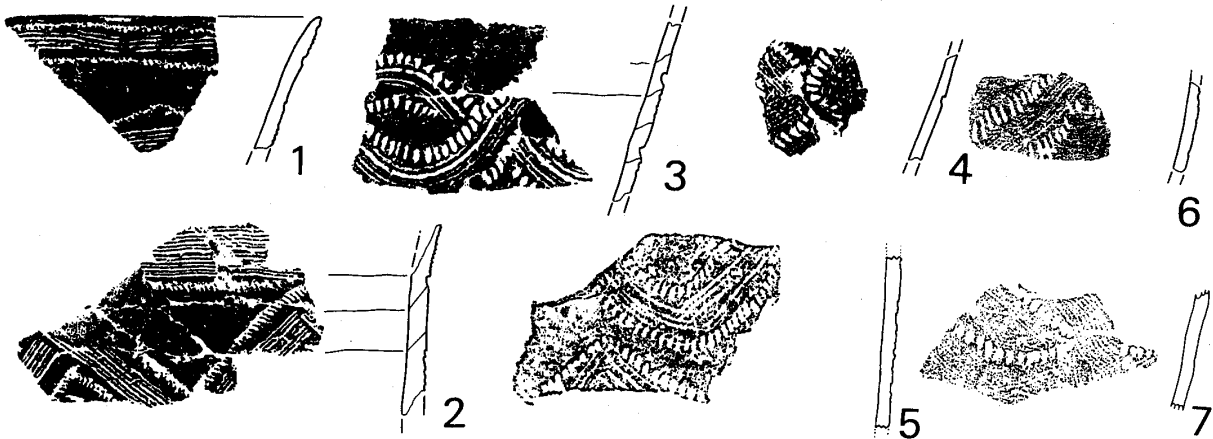


図22 虹文土器 (1~4大延坪島カチ山 5鉄原軍弾里 6毛伊島下層 7ヌンドゥル S=1/4)

ると考えられる。

問題となるのは南京1期である。宮本は南京1期を遼東半島の呉家村期に併行させている(宮本1986)。ここでの根拠は2点ある。一点目は南京1期に編年されている南京12号住居址の土器(金用珩・石光濬1984)である(図23-27, 28)。この土器は短斜沈線文が施されるため、呉家村期に併行するという考え方である。もう一点は、南京1期の37号住居址から出土した壺(図23-14)である。この壺は胴下半部に平行隆帯を一条持ち、その上を短斜線文で幾何学文様を構成しており、この文様構成が平安北道(清川江流域)の堂山下層や遼東半島の呉家村期に認められるという点である。この点には大貫も賛意を表している(大貫1989)。

そこで、これらの根拠を筆者なりに検討してみたいと思う。

まず、一点目の南京12号住居址出土資料についてである。宮本の分期は報告者である金用珩・石光濬の南京1期と2期の分期(金用珩・石光濬1984)をそのまま認めたものである。金用珩らは、1期と2期に分期する根拠として、他のどのような要素よりも胎土を重視している。即ち南京1期には胎土に滑石を混入するのに対し、南京2期には滑石を混入したものはなく砂を混入するというものである。従って、滑石を混入する12号住居址出土資料は南京1期に編年された。

ところが、呉家村期の短斜線文の施される土器に滑石を入れる例は極めて稀である。遼東半島で滑石を多く用いるのは小珠山下層期であり、それ以降は偏堡類型以外ではほとんど混入しない。しかも、ここでは丸底の土器のみが出土しており平底のものはない。このような点から、12号住居址出土土器を呉家村のものと同視することはできない。

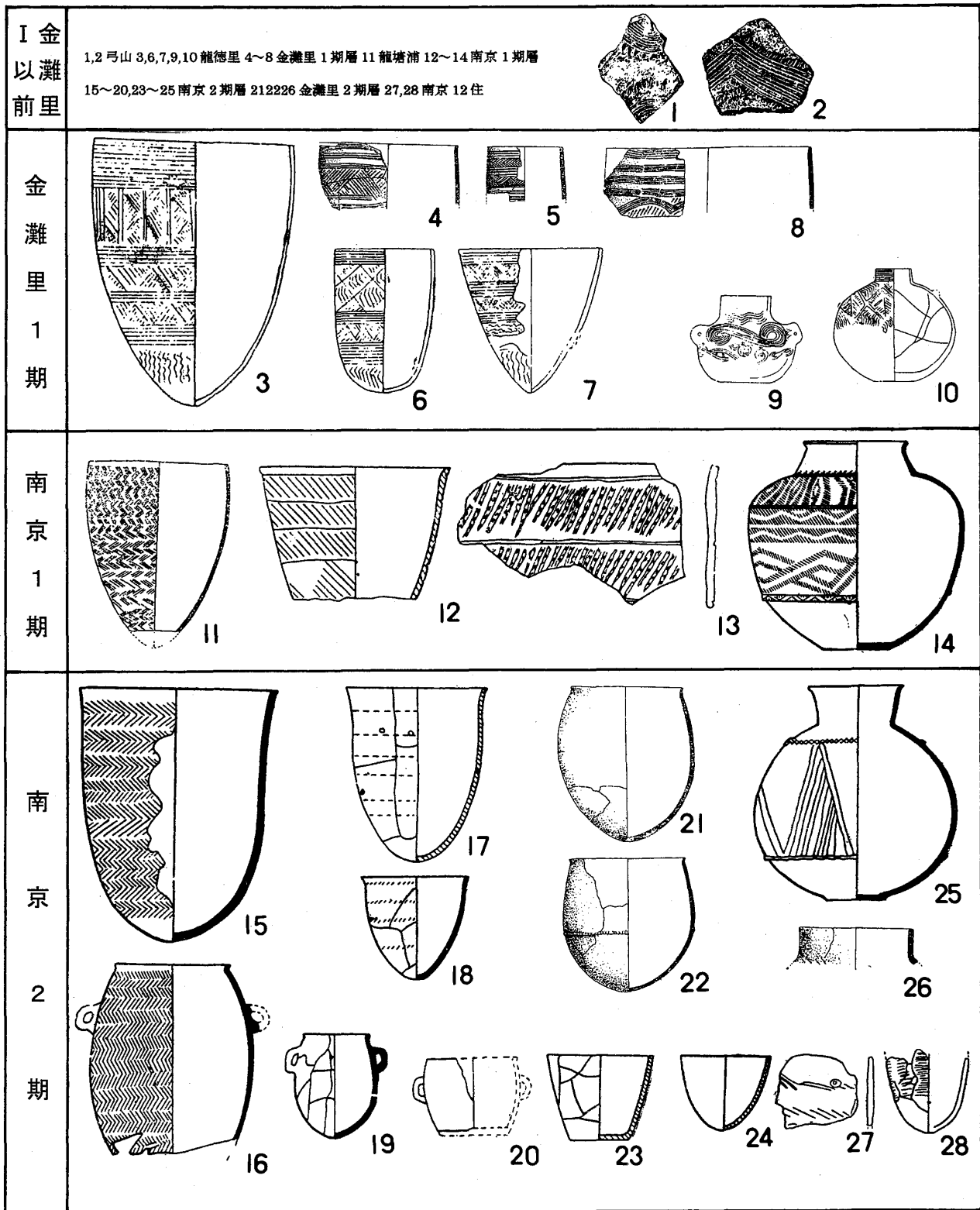


図 23 大同江流域土器編年図 (S = 1/10 破片は 1/5)

それでは、このような 12 号住居址出土の土器はどのように評価するべきであろうか。ここで京畿湾南部の新石器時代後・晩期の様相を述べてみたい。京畿湾南部では韓半島南部地域晩期併

行期の様相として烏耳島ティサルマク (뒫살막) (任孝宰ほか 2002) の様相が挙げられる (古澤 2006a)。ティサルマクでは滑石の混入した南部地域晩期併行の二重口縁土器が見られ (図 21-1)、京畿湾南部では晩期段階に滑石使用が復活するものと考えられる。そして、注目すべき資料はティサルマクと同様の年代が与えられる南北洞 (서울대학교博物館 2002) の滑石入り土器 (図 21-4) である。この土器は器形がほかの深鉢とは異なり、丸底から直線的に立ち上がる寸胴の碗で、擦過状の沈線が刻まれる。南京 12 号住居址の土器の中にも滑石を混入した寸胴の碗があり (図 23-28)、施文も擦過状の沈線が施文され、南北洞例と関連があるものと思われる。南北洞のものと南京 12 号住居址のものが、関連があるとする併行関係上、南京 12 号住居址のものは南京 2 期に編年される。したがって、南京 12 号住居址例は呉家村例よりも、むしろ京畿湾南部等で見られるティサルマク・南北洞例に近く、遼東半島に系譜を求める例としては不適當であると判断される。

次に南京 37 号住居址出土壺 (図 23-14) について考えてみたい。まず、この壺の出自であるが、前段階の龍德里 (김동일·김광철 2001) や龍谷洞窟 (金日成総合大学 1986) などで見られる金灘里 1 期の壺 (図 23-9, 10) とは、直接関連がないものと思われる。従って外来の要素を想定しなければ、説明が不可能な土器であると考えられる。そこで、遼東半島をしてみると筆者が先に指摘したように呉家村期にも壺はあるものの、それほど類似していない。むしろ小珠山上層期の壺に類似していることは既に小原哲によって指摘されている (小原 1987)。小原がかつて南京遺蹟の細分を敢えて行わなかった所以はこのあたりにあるのかもしれない。従って南京 1 期は呉家村期よりも、より小珠山上層期に近い可能性がある。また、文様構成についてであるが、短斜線をジグザグに組帯するという文様は呉家村期にも存在し、図面上では酷似している。しかし、南京 37 号住居址例は実際に観察して見ると¹⁸⁾、短斜線の間隔が極めて密に施文されている。呉家村期例の中ではそれほど密に施文した雷文構成のものは認められず、間隔があいている (図 7-9, 10 など参照)。呉家村期の文様との関連与否はもう少し慎重に考えたほうがよい。現況では別のものとして考えておいたほうが穏当である¹⁹⁾。

以上の考察から、宮本や大貫の提示した南京 1 期—呉家村期併行とする根拠は薄弱であるといえる。

一方、金用珩が小珠山中層類型と弓山 2, 3 期が併行であると想定した根拠を検討すると、遼東半島の渦文施文彩陶は膠東半島の大汶口文化に起源がある一方、弓山 2, 3 期の口縁部従属文様帯に重弧文を持つ土器はその前段階に系譜があると思われ、系統関係が異なり、また、器形や施文方法も全く異なるので、相互の関連性は薄いものと思われる。

それでは、南京 1 期やそれ以前の金灘里 1 期は遼東半島のどの段階に併行するのであろうか。平安北道 (清川江流域) の様相を通して考察してみたい。なお、以上の検討を踏まえた筆者の大同江流域の編年案を図 23 に示した。

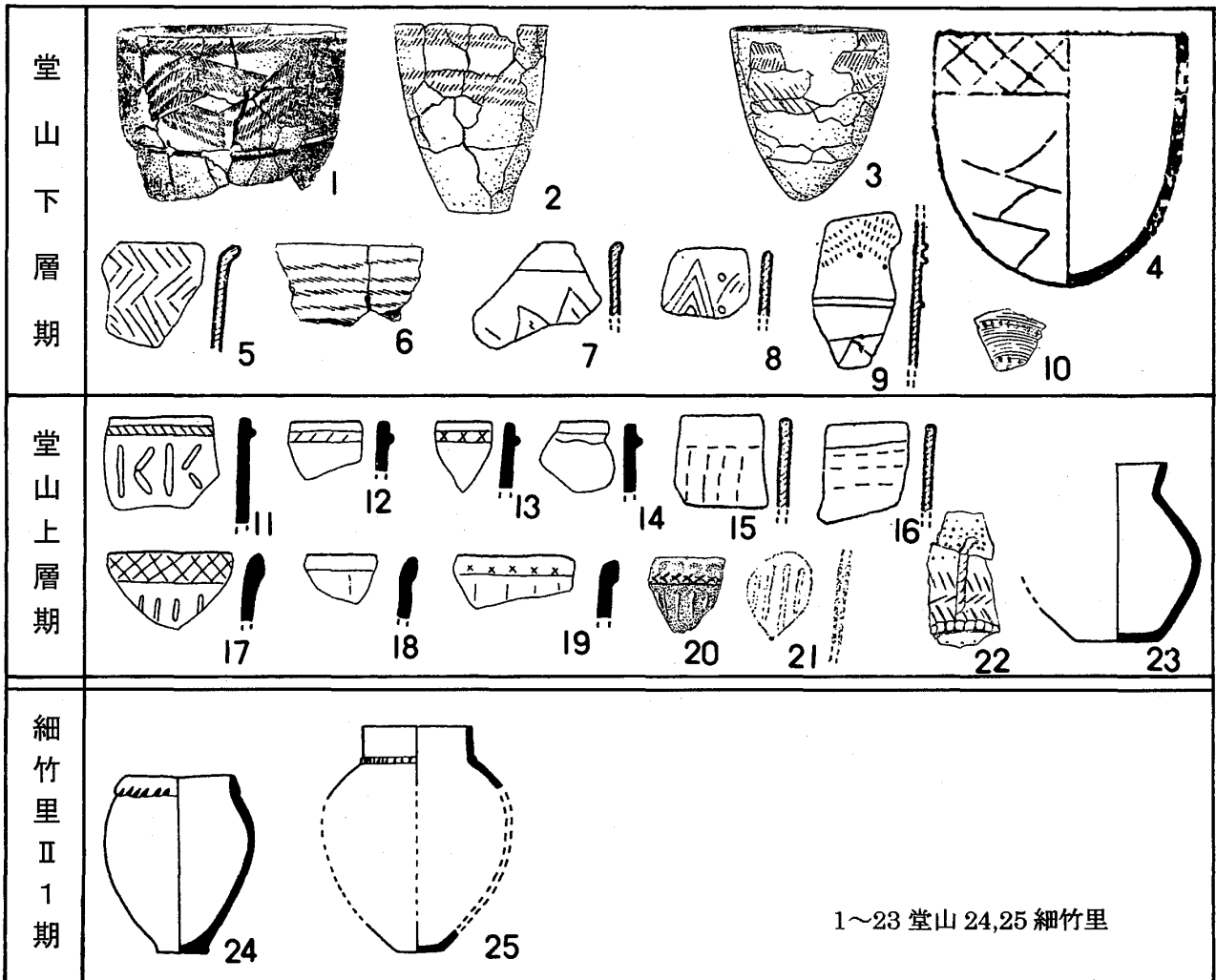


図 24 平安北道（清川江流域）土器編年図（S = 1/10 破片は 1/5 24、25 は 1/20）

Ⅸ. 平安北道（清川江流域）の編年を介して見る韓半島と遼東地域の先史土器の併行関係

清川江流域の堂山では数次に亘る調査がなされている。1958年4月の調査では、中間に粘土層の間層をはさみ上下2層の貝層に分かれるとしているものの、ここでは本来の先後関係とは正反対に逆堆積しているものと評価された(都宥浩 1960)。その後 1991年9・10月にも調査がなされた(차달만 1992)。ここでは砂層を間層とし、上下2文化層に分層された。ここでは1958年調査とは異なり順堆積しているものと評価され、下文化層と上文化層は明確に土器相が異なることが指摘されている。

宮本は1991年の調査成果を、かつて自身が堂山の土器に関して型式学的に分離した下層と上層の土器(宮本 1985)が層位的に区分されて出土したものと評価をしている(宮本 1995)。一方、金英熙は、차달만이下層と指摘した土器の中にも新しい様相を呈する土器が混在しているとして、かつて都宥浩が指摘したような逆堆積の可能性も否定できないという慎重な評価をくだしている(金

英熙 2002)。

混在なく明確に層位的に現れているかは別として、多くの研究者が指摘するように堂山は遼東半島の呉家村期と偏堡類型の段階の2時期の様相を呈していることは明白なことである。従って、以下では宮本の方針のように型式学的に見て、呉家村期併行段階の土器を堂山下層の土器(図24-1~9)、偏堡類型(東高台山タイプ)併行段階の土器を堂山上層の土器とする²⁰⁾(図24-11~23)。堂山下層期では平底と丸底が認められる。図24-1や6のように組合文2や細い短斜沈線文が施される土器は遼東半島の呉家村期の土器に非常に類似する。特に図24-1は棒状貼付文が施されており、遼東半島では図10-11などに類例が求められる。丸底の土器にも呉家村期的な文様が施文される(図24-3, 4)。丸底は清川江以南の丸底土器の影響と考えられ、一種のキメラ土器といえよう。しかし、大同江流域の丸底土器は底部によって編年されているわけではないので、これらの丸底土器によって併行関係を考察することはできない。堂山上層期は偏堡類型の段階である。ここでは東高台山タイプが見られるため、双鶴里1期や三堂村1期に併行するものと思われる。

ところで、1958年の調査成果として報告された土器の中に虹文土器²¹⁾が存在する(図24-10)。この虹文土器は大同江流域を中心に分布するもので、金灘里I式土器やそれ以前の土器²²⁾に伴うものである(図23-1, 2, 8)。特に大延坪島カチ山では虹文土器が多く出土し、中には口縁部片も含まれていた(図22-1, 2, 3, 4)。従来、このような虹文土器が全体でどのようなモチーフが描かれていたのか不分明であったが、金灘里第1文化層(金用珩1964)例(図23-8)と同様に口縁部にも刺突列の間に条線を配することが判明した。従って、虹文土器は所謂「区分文系土器」のような文様配列ではなく、金灘里1式(図23-3~7)のような重畳系の文様配列がなされていることがわかり、金灘里1式土器との共通性を認めることができる。このような土器は南韓の大延坪島カチ(까치)山(尹相俊・曹美順2005)、大延坪島E地点(任孝宰1969)、毛伊島下層(李相俊ほか2003)²³⁾、永宗島ヌンドゥル(늬들)(任孝宰・梁成赫1999)、鉄原軍弾里(김남돈1995)で出土しており(図22)、それぞれ金灘里1期に併行すると考えられる土器と共伴している²⁴⁾。筆者が実見したことのある虹文土器²⁵⁾は全て石綿が混入され、器壁が他の土器より薄手のものが多い。大同江流域の虹文土器も石綿を混入するようである。

それでは、この虹文土器は堂山下層・上層いずれに伴うものであろうか。宮本や筆者の下層・上層の区分とは若干差異があるため参考ではあるが、차달만의報告(차달만1992)に準拠して考えてみよう。차달만は先述のように下層と上層を分層したときに遺物に明瞭な差異があることを指摘しているが、それを示す表が提示されている。ここで土器混和材に注目すると上層では砂を混和するものが認められるのに対し、下層では砂をはじめ滑石、粘土そして石綿が混入されたものが認められることが示されている。これを参考にすると石綿の混入された可能性の高い虹文土器は下層に伴うものであると考えられる。

そこで問題となるのが堂山下層の上限である。堂山下層では後窪上層類型の土器は一点も出土していない。従って、堂山下層は美松里下層2期(鴨緑江下流域)一閻坨子期(丹東地区)一呉家村

期（遼東半島）併行であり、丹東地区の後窪上層段階までは遡るものではないことが予想される。勿論、平安北道の鴨緑江下流域まで後窪上層類型が分布し、清川江流域までは後窪上層類型が分布しなかったという可能性が考えられるが、そうであっても堂山下層では呉家村期を遡る資料は出土していない。

以上の考察を踏まえると金灘里 1 期²⁶⁾—堂山下層期—美松里下層 2 期—閻坨子期—呉家村期—北莊 2 期（大汶口中期）という北韓側の見解により近い併行関係を導くことができる。これは従来、金灘里 1 期の次の段階である南京 1 期を呉家村期に併行させてきた宮本や大貫の見解（宮本 1985, 1986；大貫 1989）に再考を促すものである。また、このように考えた場合、林尚澤は金灘里 1 期の龍德里の壺（図 23-9, 10）が後窪下層期（小珠山下層期併行）の後窪下層や大崗で出土する壺と類似していることから搬入品ではないかとの見解を示したことがある（林尚澤 2006）が、併行関係上からは成立し難い想定である。

なお、平安北道では堂山下層だけでなく虹文土器が細竹里（안병찬 1962；金政文 1964；金永祐 1964）でも出土しており、清川江附近では虹文土器が出土することがあるということがわかる。

青銅器時代にはいと細竹里の美松里型土器の文化層の下から出土した二重口縁の下端部に刻目を持つ深鉢と頸部に刻目隆帯がめぐる大型の壺の組成の細竹里Ⅱ 1 の土器が見られるようになる（図 24-24, 25）。この土器は多くの研究者が指摘するように（後藤 1971；西谷 1977；藤口 1986 など）新岩里第 3 地点第 2 文化層期との関連が想定される資料である。

近年、報告された九龍江（石光濬・김재용 2003）は 1 期から 3 期に分期されている。この内美松里型壺の伴う第 2 文化層より層位的に下部の第 1 文化層を차달만は細竹里青銅器時代 1 期層より古く想定している（차달만 1993）が、これは細竹里青銅器時代 1 期層の土器を広く把握しているためと考えられる。九龍江 1 期の資料は資料数が限定されているが、二重口縁下端部に刻目のある深鉢や口縁下部に刻目隆帯を持つ土器、縦位の把手があり、やはり新岩里第 3 地点第 2 文化層期との関連も想定されることから、現時点では細竹里Ⅱ 1 期と近い時期のものと考えておきたい。なお、中村大介は石鏃の分析から九龍江 1 期が公貴里 2 号住居址の段階と併行関係であると想定している（中村 2005）。

大同江流域では青銅器時代に入るとコマ形土器が見られるようになる。かつて黄基徳ら北韓の研究者はコマ形土器の上限を細竹里Ⅱ 1 を介して新岩里第 3 地点第 2 文化層期までは遡りうるという見解をしめしたことがあり（黄基徳 1966；社会科学院考古学研究所 1977）、大貫も同様の見解を示したことがある（小川 1982, 大貫 1994）。器種の組成で見てもコマ形土器の甕（深鉢）と大型の壺という組成²⁷⁾は新岩里第 3 地点第 2 文化層期—廟後山上層早期からのものであるため、やはり上限は新岩里第 3 地点第 2 文化層—双砬子 3 期が想定され、それ以上遡らないものと思われる。そのように考えた場合、現在知られている新石器時代の最晩期である南京 2 期は郭家村上層の壺から小珠山上層期、下っても青燈邑期—双砬子 1 期に併行するのであるから、南京 2 期とコマ形土器の間には遼東半島との編年に照らし合わせた場合、少なくとも双砬子 2 期²⁸⁾分のヒアタス（空白期）

が存在する可能性がある。

X. 併行関係と地域間関係の変遷

これまで見てきた新石器時代中期から青銅器時代にかけての小地域ごとの編年の併行関係を示したものが表3,4である。以下ではこれに準拠しながら、地域間関係の変遷について述べる。

小珠山中層併行期では遼東半島では組合文1に見られる押捺と太目の沈線の土器が主体であるが、太子河流域、丹東地区、平安北道（鴨緑江下流域）では弦文を特徴とする後窪上層類型が展開した。遼東半島では膠東半島との交流が相互で見られたが、近年の北荘の資料の出現によって後窪上層類型と膠東半島との関わりも考慮する必要が生じてきた。これに関しては資料の増加を待ち、論じたい。

呉家村期併行期になるとそれまで、小珠山中層と後窪上層で区分されていた地域圏と関りなく遼東半島、丹東地区、太子河上流域、平安北道（鴨緑江下流域、清川江流域）で組合文2のような細かい沈線による呉家村的な文様の施文された土器が広くみられるようになる。この呉家村的な土器は組合文で筆者が示したように後窪上層ではなく遼東半島の小珠山中層期に文様の祖形を辿ることができるので、遼東半島から周辺地域へ拡散した可能性が高い。吉長地区の西断梁山2期も呉家村期である点を考慮すると瀋陽地区にも拡散していた可能性が高い。この呉家村的な土器の広がり南端部が清川江流域であり、この段階の清川江流域では大同江流域の丸底土器との接触によってキメラ土器が生成された。一方で、大同江流域から虹文土器がひろがり、清川江流域は遼東半島的な平底土器を基盤に大同江流域の丸底土器が交錯した状況を呈している。

東高台山タイプ偏堡類型の段階（三堂村1期）になると遼東半島以外に系譜が求められる偏堡類型の土器が瀋陽地区、遼東半島、太子河流域、丹東地区、平安北道（鴨緑江下流域・清川江流域）と広い範囲に見られるようになる。広い地域で斉一的な様相が拡がるという点では呉家村期と類似するが、大同江流域との関係はそれほど顕著ではなくなる。この頃、鴨緑江上流域はより東の文化との関係をもちつつ独自の様相を呈していたものと思われる。

小珠山上層期になると遼東半島では山東龍山文化から影響を受け、それまでの筒形罐主体の組成から折縁罐主体の組成へと移行する。但し、前段階の東高台山タイプの偏堡類型の土器から発展したと想定される二重口縁筒形罐を組成として持つ点では在地性を示している。この折縁罐主体の組成は他地域にも拡散するが、遼東半島から離れるにつれ山東龍山的な組成は崩れており、また山東龍山的な器種の在地変容と考えられる折縁罐Ⅱ類や斜格子文施文の三環足器などが遼東半島の周辺地域で見られる（表5）。一方で、折縁罐を受容しなかった瀋陽地区では前段階の東高台山タイプの偏堡類型の土器に系譜が求められる肇工街タイプの土器中心の組成を示し、独自の様相を示す。そして、山東龍山的な器種が在地化しながら受容された丹東地区、太子河流域、鴨緑江下流域など

表3 併行関係表1

膠東半島	遼東半島	瀋陽地区	太子河上流域	丹東地区
北荘1期	小珠山中層期		馬城子下層1期	後窪上層期
北荘2期	吳家村期	—	馬城子下層2期	閻坨子期
楊家圈1期	三堂村1期	東高台山2期	馬城子下層3期	
楊家圈2・3期	小珠山上層期	肇工街期	馬城子下層4期	石仏山期(古)
	双砬子1期 単砬子包含層			
照格荘期	双砬子2期	高台山Ⅰ組	廟後山中層	石仏山期(中)
珍珠門期	双砬子3期	高台山Ⅱ組	廟後山上層早期	石仏山期(新)

表4 併行関係表2

遼東半島	鴨緑江下流域	鴨緑江上流域	清川江流域	大同江流域
小珠山中層期	盤弓里1期			
吳家村期	美松里下層2期		堂山下層期	金灘里1期
三堂村1期	双鶴里1期	土城里期	堂山上層期	南京1期 ↓↑? 南京2期 ↓?
小珠山上層期	双鶴里2期			
双砬子1期	青燈邑期	五女山城F48		
単砬子包含層	新岩里3地点1文化層			
双砬子2期	新岩里4地点2文化層			
双砬子3期	新岩里3地点2文化層	深貴里1住期	細竹里Ⅱ1	コマ形土器?

表5 小珠山上層期併行期の膠東系土器

	折縁罐Ⅰ類	単耳杯	三環足器	折縁罐Ⅱ類	斜格子施文三環足器
膠東半島・廟島群島	○	○	○		
遼東半島	○	○	○	○	
丹東地区			○	○	○
太子河上流域				○	
平北(鴨緑江下流域)				○	

にも肇工街タイプの偏壘類型土器が組成として加わるようになる。折縁罐を主要器種とする遼東半島と肇工街タイプの偏壘類型土器を主要器種とする瀋陽地区という二つの中心地があり、丹東地区・太子河上流域・鴨緑江下流域はそれらが交錯した地域であると考えられる。진소리が注目した遼東半島と丹東地区の器種の差異(진소리 1997)はこのように説明できる。そのような状況の中で大同江流域の丸底土器分布圏では南京2期にみられる壺のように小珠山上層期的な土器を一部に受容していることは大変興味深い点である。

双砬子1期併行期になると遼東半島では弦文の施文された大口高領壺を中心とした双砬子1期文化が広がるが、丹東地区や平安北道(鴨緑江下流域)では独自の幾何文を施文したり、頸部に刻目

隆帯をめぐらせた大口高領壺を中心とした独自の様相を呈するようになる。この段階では丹東地区・平北（鴨緑江下流域）の有文大口高領壺が遼東半島の東側にも見られるようになり、さらにそれまで西側とはそれほど交渉が見られなかった鴨緑江上流域でも平北（鴨緑江下流域）的な有文大口高領壺が認められるようになる。さらに、双砬子1期後半になると単砬子包含層で見られたように丹東地区・平北系の器種を組成として揃えた遺蹟が遼東半島東側で見られるようになり、丹東地区・平北（鴨緑江下流域）の文化の拡大が看取できる。

双砬子2期併行期では、遼東半島は山東岳石文化と強い関連をもっており、双砬子2期文化は周辺地域では全く認められず、独自の様相を呈す。このころの丹東地区・鴨緑江下流域の様相はよくわからない。太子河流域では廟後山中層類型が展開し、瀋陽地区では遼西との繋がりも認められる高台山I組がみられ、地域色が強まる段階と考えられるだろう。

続く双砬子3期併行期では遼東半島では膠東との影響関係を脱し、独自の双砬子3期文化が展開する。一方、太子河上流域の廟後山上層早期類型は平安北道（鴨緑江下流域）の新岩里II期や鴨緑江上流域の深貴里Iと一定の関係を持つようになる。そして、ここでは甕（深鉢）と大型の壺という組成が安定的に見られるようになり、韓半島の「無文土器」的な組成の始原となった可能性が指摘しうる。

以上、新石器時代中期から青銅器時代にかけて遼東地域と韓半島西北部では少なくとも土器文化においては必ずしも膠東半島→遼東半島→韓半島という一方向で展開しているのではないということを示した。即ち、各小地域があるときは核地域となり、あるときは周辺地域となるという非常に動的な展開をみせている。従来、遼東地域においては極東平底土器が終焉し、石器組成も大きく変わる時期として小珠山上層期を大きな画期と捉える見解が示されてきた。それでもその大きな変革を遼東半島の周辺地域はそのまま受容したのではなく、在地化の過程を経ながら受容・独自発展してきた点が重要な点である。青燈邑期や新岩里第3地点第1文化層期には鴨緑江下流域の独自発展した土器文化が遼東半島東部へ流入する動きも看取でき、遼東半島→鴨緑江下流域という流れのみでは決してない。この青燈邑期・新岩里第3地点第1文化層期の土器文化の在地的発展と地域間の変化こそが、遼東半島のみではなく太子河上流域など遼東山地部との関連性が高い²⁹⁾新岩里II式土器を成立せしめた一因となったと提起しておくのもあながち間違いではなかろう。

本稿は「韓半島新石器時代後・晩期土器文化動態研究」という主題の修士論文を2005年12月に東京大学に提出した後、韓半島の先史文化を東北アジア的視野で把握する必要性を感じ、書かれたものである。大貫静夫先生との日頃の議論、2004年10月の大貫静夫先生、後藤直先生、谷豊信先生、中村大介氏、庄田慎矢氏との遼寧・内モンゴ調査旅行は本稿を作成する契機となりました。また、各地の資料についての実見・実測、東大文学部資料再整理にあたり、김남돈, 金恩瑩, 徐潤姬, 宋賢永, 梁時恩, 李相俊, 林尚澤, 鄭仁盛, 曹美順, 한나래, 岡村秀典, 加藤克, 宮本一夫, 山浦清, 江原大学校博物館, 大韓民国国立文化財研究所(大田, 서울), 서울大学校博物館, 九州大学文学

部考古学研究室、京都大学人文科学研究所、北海道大学植物園、立教大学学校・社会教育講座の諸先生、諸機関にご便宜を図っていただき、有益なご助言を賜りました。記して感謝いたします。

〈註〉

- 1) 「朝鮮半島」と同義である。本稿では大韓民国を南韓、「朝鮮民主主義人民共和国」を北韓と呼称する。
- 2) 以下では便宜上「韓半島丸底土器」と呼称する。
- 3) 東大文学部所蔵文家屯の資料は来歴が不明である。京都大学所蔵資料は1942年の日本学術振興会の調査による資料であるが、東大文学部資料もこの調査時のものであった可能性もある。
- 4) 京大資料について松野元宏は「縄叩き」の土器がA地点2層で出土していると報告した(遼東先史遺跡報告書刊行会2002)。筆者が実見した結果、当該資料は新石器時代のものではなく、漢代土器であることが判明した。東大所蔵文家屯資料の中にも漢代土器があるので、文家屯は正確には漢代までの資料があるということになる。
- 5) 中国側ではこの文様を組合文と呼称することがあるので、筆者もこれに従う。
- 6) 膠東半島の土器編年に関しては様々な研究者が論じているが(韓榕1986, 嚴文明1989, 李歩青・王錫平1988, 宮本1990, 李権生1991, 1992など)、大枠は一致している。
- 7) 本土器は遼東先史遺跡報告書刊行会2002の図27-598の資料である。図27-598では刻目が右下がりになっているが、実際には左下がりである。
- 8) 解放後の郭家村の報告(許玉林・蘇小幸1984)で水波文が郭家村上層(小珠山上層期)で出土しているとなっているが、子細に検討すると水波文の出土した73年トレンチ1の②層では円形の突起がつく折縁罐が出土しており、類例は楊家圈1期層で見られるものである。そして、そのほかに小珠山上層期と断言できる資料は報告されていない。従って、郭家村の分層の主軸となる76年トレンチの層位と73年トレンチの層位が合致するかどうかについては検討の余地があるともいえる。松野は文家屯C地点の水波文土器について郭家村上層を類例として挙げ、小珠山上層期に断代しているが(遼東先史遺跡発掘報告書刊行会2002)、水波文は小珠山上層期併行期の遼東半島・膠東半島には基本的には認められない。
- 9) 洪子東例は原報告では杯残底として報告されている。破片であるため把手の痕跡などはわからない。郭家村例と特徴が非常に類似しているため蓋である可能性があるが、たとえ杯であってもその類似性から郭家村の蓋と無関係の遺物ではない。
- 10) 王青が小珠山上層期から双砬子1期を山東龍山文化の一類型として把握している点に関しては既に反論がある。筆者としても上で示したように小珠山上層期の二重口縁筒形罐のように中国東北部在地の偏堡類型からの系譜が辿れるものもあるため、山東龍山文化の一類型と把握する立場をとらない。
- 11) なぜ北韓の研究者が偏堡類型や郭家村上層の二重口縁土器や口縁隆帯土器を双砬子2期に編年したのかについては肇工街の理解の相違による。北韓側の肇工街の報告(朝中共同発掘隊1966)では、肇工街タイプの偏堡類型の土器と冑または甗の足が相伴したと報告された。甗は遼東半島では双砬子2期以降、遼西では夏家店下層期に現れるため、偏堡類型も相対的に遅い年代が考えられたのであった。北韓側の報告のみが公表されていた段階であったため大貫は北韓の見解に従っていた(小川1982)。その後、中国側の肇工街の報告(安志敏・鄭乃武1989)が公表され、肇工街では分層発掘がなされていたことが明らかとなり、冑または甗の足は肇工街タイプの偏堡類型の土器より上層で出土したことが示された。一方で、宮本が中国側の報告が公表される前に肇工街の冑または甗の足が混在であることを想定し、一括性を認めず、偏堡類型を正しく編年した(宮本1985)のは卓見であった。その後、大貫も宮本の見解に従っている(大貫1989)。
- 12) 召瑩己は北呉屯上層の少量の之字文から下層との継承性を想定している(召瑩己2001)。
- 13) 召瑩己は石仏山で雷文が出土し、海參罐が出土せず、大藩家村、郭家村上層、双砬子1期層では雷文が出土せず、海參罐が出土する点から石仏山を大藩家村、郭家村上層、双砬子1期層より早い段階に編年

している(김영근 2000)が, 雷文施文大口高領壺も海參罐も地域的な器種なので単純に時期差とは想定できない。

- 14) 正確には平行横線と浮文をつけており, 千羨幸のいう「点列文」は刺突文ではない。
- 15) よく知られるように新岩里第3地点第2文化層では青銅刀子と青銅泡が出土している。この青銅刀子は一般に商殷代のものと把握されており, 土器編年とも整合的である。さらに, この新岩里青銅刀子は殷墟の青銅刀子を分析した劉一曼の分類(劉一曼 1993)の環首刀A I式(内反りで柄部と刃部がなだらかにつながり境界が明確ではない型式)に最も近い。殷墟ではこのA I式は小屯M5(婦好墓)(中国社会科学院考古研究所 1980)と侯家莊M1209, 1923(李濟 1949)で確認され, 殷墟期の中でも前期に属すると劉一曼は想定している。劉一曼の想定が正しければ, 新岩里青銅刀子の年代もかなり限定される可能性がある。これまでのところ遼寧省内では望花(撫順市博物館 1981, 王秀嫣 1983, 郭大順 1993), 湾柳街(曹桂林 1988, 何賢武ほか 1989, 裴躍軍ほか 1990, 曹桂林・莊艷傑 1997), 楊河(李健民・傅俊山 1978, 郭大順 1993, 秋山 1995), 馮家(王雲剛ほか 1996)で商代青銅刀子が出土しているが, 楊河と馮家では環に3個の突起を有する環首刀(劉一曼分類C式)と, 柄部と刃部の間に突起を有する刀子(劉一曼分類のA II式など)が共伴し, A I式との共伴は確認されておらず, 新岩里とは差異がある。その要因は微妙な時期差なのか, 青銅器受容の関する何らかの差異なのかは今後の検討課題とするが, 大貫がいうように遼寧式銅劍出現以前の青銅器の在り方を示す(大貫 1982, 1998)のは疑いない。
- 16) ザイサノフカ文化の細分は伊藤慎二案(伊藤 2005)に従う。但し, 伊藤編年においては南沿海州では渦文土器の段階が認定されておらず, 西浦項3期との併行関係が明確にされていない。かつてA.П. オクラドニコフは渦文土器が出土したシェニキナ・シャプカ-2を雷文土器が出土したクロウノフカ(チャピゴウ)-2の前段階に編年しており, 渦文土器の段階を設定していた(Окладников 1970)。そして, Д.Л. Бродянский, 大貫, 정봉찬, 김성국, 福田正宏らは渦文土器を出土するアレニーA(Бродянский 1987)が西浦項3期と併行関係にあると論じている(Бродянский 1979; 大貫 1989; 정봉찬 1997; 김성국 2000, 2005; 福田 2004)。渦文土器はシェニキナ・シャプカ-2, アレニーA 23号住居址以外でも, グヴォスジェヴァ-4(Попов・Батаршев 2002), レビアジャ(Okladnikov 1981)などで出土し, ハサン地区からナホトカ近辺までの広い範囲で分布を確認でき, 渦文土器の段階が南沿海州でも存在したであろうことが推定される。そこで, 伊藤のザイサノフカ細分編年において西浦項3期がザイサノフカ古段階に入るのか新段階に入るのかが問題になるが, 上記の渦文土器が古段階の縄線文土器に伴うという報告はなく, 比較的内容が単純な様相を示すグヴォスジェヴァ-4では新段階の土器が伴う。従って, 本稿では西浦項3期もザイサノフカ新段階の範疇で把握し, 西浦項3・4期-ザイサノフカ新段階と表記する。また, 紡錘車でみた場合でも西浦項3期がザイサノフカ新段階に併行するであろうことは既に指摘した(Furusawa 2007)。
- 17) 姜仲光の雷文分類(姜仲光 1975)の青燈邑型に該当し, 雷文からも年代としては青燈邑期, 系譜としては鴨緑江下流域と想定することができる。
- 18) 大邱博物館で行われた『北側の文化遺産』展(国立中央博物館 2006)へ2006年9月に大貫静夫氏とともに訪れ, ガラス越しに観察した際の所見である。
- 19) 密に短斜沈線文の雷文を施し, 胴部に隆帯を持つという点では丹東地区の西泉眼などとの関連も想定しうる。
- 20) 차달만は堂山上層の土器を肇工街など偏堡類型の土器と関連づけながらも青銅器時代の最も古い土器と位置づけている(차달만 1993b, 1997)。この年代的位置付けは先に註11でふれた偏堡類型-双砵子2期併行説の影響ではないかと推察される。
- 21) 本稿の虹文土器とは刺突列の間に条痕状の条線を配するものである。筆者の実見では条線は貝殻によって施文されたと判断されるものも多い。北韓ではこのような文様の土器を「무지개 무늬」と呼称するため本稿では虹文土器と表現する。虹文土器の多く出土した大延坪島カチ山では, 虹文とは言いがたいが, 通有の特徴を持つ土器があり, 本稿ではこれも虹文土器に含める。

- 22) 金灘里 1 式土器の出土しない智塔里 (科学院考古学吳 民俗学研究所 1961) や弓山 (科学院考古学吳 民俗学研究所 1957) から出土することがあるため、金灘里 1 期以前から虹文土器が存在する可能性がある。しかし、金灘里 1 期に近接した時期であると考えられる。
- 23) 毛伊島の編年的位置付けは研究者によって異なるが、筆者は毛伊島の層位を検討した結果、X 層以上の層位 (本稿では毛伊島上層と呼称する) と X I 層以下の層位 (毛伊島下層と呼称する) では土器相が異なると考えた。毛伊島上層では横走魚骨文深鉢と短斜沈線文深鉢のセットや大同江流域に多い無文の甕形土器が見られるので、大同江流域の南京 2 期に併行すると考えられる。一方、下層では口縁部を多歯具で施文した区分文系土器と菱形のモチーフを押引で施文する土器が出土しており、金灘里 1 期に併行する段階であると想定される。虹文土器が出土したのは下層 (X II - ②層) からである。
- 24) この点に関しては別稿にて詳述する。
- 25) 筆者は大延坪島カチ山, 毛伊島下層, 永宗島ヌンドゥル, 鉄原軍弾里の資料を実見・実測することができた。
- 26) 正確には先述のように金灘里 1 期以前にも虹文土器が存在するようなので「金灘里 1 期またはその直前」とすべきである。しかし、どちらにしても従来の南京 1 期 - 吳家村期併行説は成立しない。
- 27) ここでは詳述しないがコマ形土器に関しては様々な編年案が出され、最古のコマ形土器は研究者ごとで異なるが、どの編年案を採用した場合であっても、現在知られている最古のコマ形土器の中では甕 (深鉢) と大型の壺という組成を見ることができる。
- 28) 但し、千葉の見解 (千葉 1990) のように双砵子 2 期が双砵子 1 期ないし双砵子 3 期に吸収されるという立場をとった場合は、この限りではない。
- 29) 鄭漢徳は後の美松里型土器の形成にあたって太子河流域など遼東山地部を重視する見解を提示しており重要である (鄭漢徳 1996)。

<参考・引用文献>

<中文>

- 安志敏 1962 「記旅大市兩処貝丘遺址」『考古』1962(2)
- 安志敏・鄭乃武 1989 「瀋陽肇工街和鄭家窪子遺址的發掘」『考古』1989(10)
- 北京大学考古実習隊・山東省文物考古研究所 2000 a 「栖霞楊家園遺址發掘報告」『膠東考古』
- 北京大学考古実習隊・山東省文物考古研究所 2000 b 「萊陽於家店的小發掘」『膠東考古』
- 北京大学考古実習隊・煙台市文物管理委員会 2000 「乳山小管村的發掘」『膠東考古』
- 卜工 1999 「遼寧東部地区商周時期的陶壺譜系及相關問題」『北方文物』1999(4)
- 蔡鳳書 1993 「關於《貔子窩》的陶器」『遼海文物學刊』1993(2)
- 曹桂林 1988 「法庫県青銅文化遺址的考古發現」『遼海文物學刊』1988(1)
- 曹桂林・莊艷傑 1997 「法庫灣柳街遺址出土的青銅時代器物」『遼海文物學刊』1997(1)
- 陳大為 1960 「桓仁県考古調查發掘簡報」『考古』1960(1)
- 陳光 1989 「羊頭窪類型研究」『考古學文化論集』2
- 陳国慶・万欣・劉俊勇・王王从 1992 「金州廟山青銅時代遺址」『遼海文物學刊』1992(1)
- 陳連旭 1978 「旅順老鉄山積石墓」『考古』1978(2)
- 陳雍 1992 「左家山新石器遺存分析」『考古』1992(11)
- 陳全家・陳国慶 1992 「三堂新石器時代遺址分期及相關問題」『考古』1992(3)
- 陳全家・陳国慶・劉俊勇・梁振晶 1992 「遼寧省瓦房店市長興島三堂村新石器時代遺址」『考古』1992(2)
- 陳全家・趙賓福 1989 「農安左家山新石器時代遺址」『考古學報』1989(2)
- 陳全家・趙賓福 1990 「左家山新石器時代遺址的分期及相關文化遺存的年代序列」『考古』1990(3)
- 大貫静夫 1989 「東北亞洲中的中国東北地区原始文化」『慶祝蘇秉琦先生考古五十五年論文集』
- 大連市文物考古研究所 2000 『大嘴子 青銅時代遺址 1987 年發掘報告』
- 董新林 1996 「高台山文化研究」『考古』1996(6)

- 撫順市博物館 1981 「遼寧撫順市發現殷代青銅環首刀」『考古』1981(2)
- 岡村秀典 1992 「遼東半島与山東半島史前文化的交流」『環渤海考古國際學術討論會論文集』
- 郭大順 1993 「遼河流域“北方式青銅器”的發現与研究」『內蒙古文物考古』1993(1), (2)
- 郭大順·馬沙 1985 「以遼河流域為中心的新石器文化」『考古學報』1985(4)
- 韓榕 1986 「膠東史前文化初探」『山東史前文化論文集』
- 何賢武·鄭辰·趙常琳·曹桂林 1989 「遼寧法庫縣灣柳街遺址發掘」『考古』1989(12)
- 侯建業 2006 「原始聚落“東半坡”——北莊遺址」『考古煙台』
- 馮恩學 1991 「東北平底筒形罐區系研究」『北方文物』1991(4)
- 蔣英炬 1963 「山東膠東地區新石器時代遺址的調查」『考古』1963(7)
- 金旭東 1992 「試論西斷梁山新石器時代遺存」『考古』1992(9)
- 李步青·王錫平 1988 「膠東半島新石器文化初論」『考古』1988(1)
- 李恭篤 1985 「遼寧東部地區青銅文化初探」『考古』1985(6)
- 李恭篤 1989 「本溪地區三種原始文化的發現及研究」『遼海文物學刊』1989(1)
- 李恭篤 1992 「本溪地區洞穴文化遺存的發現与研究」『北方文物』1992(2)
- 李恭篤·高美璇 1998 「試論偏堡文化」『北方文物』1998(2)
- 李恭篤·劉興林·齊俊 1985 「遼寧本溪廟後山洞穴墓地發掘簡報」『考古』1985(6)
- 李濟 1949 「記小屯出土之青銅器 中篇」『中國考古學報』4
- 李健民·傅俊山 1978 「遼寧興城縣楊河發現青銅器」『考古』1978(6)
- 李晚鐘·藺新建 1991 「下遼河流域早期青銅文化譜系研究」『遼海文物學刊』1991(1)
- 梁志龍 1991 「桓仁大梨樹溝青銅時代墓葬調查」『遼海文物學刊』1991(2)
- 遼寧省文物考古研究所 2004 『五女山城 1996～1999、2003年桓仁五女山城調查發掘報告』
- 遼寧省文物考古研究所·本溪市博物館 1994 『馬城子 太子河上游洞穴遺存』
- 劉法祥 1960 「吉林通化市江口村和東江村考古發掘簡報」『考古』1960(7)
- 劉俊勇 1994 「遼寧大連大藩家村新石器時代遺址」『考古』1994(10)
- 劉俊勇 1981 「大連市小黑石砬子古代遺址破壞記實」『遼寧文物』1981(1)
- 劉俊勇·王王从 1994 「遼寧大連市郊區考古調查簡報」『考古』1994(4)
- 劉俊勇·張翠敏 2006 「遼寧大連大砬子青銅時代遺址發掘報告」『考古學報』2006(2)
- 劉一曼 1993 「殷墟青銅刀」『考古』1993(2)
- 龐志國·宋玉彬 1991 「吉林東豐縣西斷梁山新石器時代遺址發掘」『考古』1991(4)
- 裴躍軍·許志國·曹桂林·周向永 1990 「法庫縣灣柳街遺址試掘報告」『遼海文物學刊』1990(1)
- 齊俊 1987 「本溪地區太子河流域新石器至青銅時期遺址」『北方文物』1987(3)
- 齊俊 1991 「遼寧桓仁渾江流域新石器時代及青銅時期的遺跡和遺物」『北方文物』1991(1)
- 曲瑞琦·沈長吉 1978 「瀋陽新樂遺址試掘報告」『考古學報』1978(4)
- 曲瑞琦·於崇源 1982 「瀋陽新民縣高台山遺址」『考古』1982(2)
- 沈長吉·曲瑞琦·李晚鐘 1986 「新民東高台山第二次發掘」『遼海文物學刊』1986(1)
- 蘇小幸·劉俊勇 1983 「大連新金縣喬東遺址發掘簡報」『考古』1983(2)
- 蘇小幸·王嗣洲 1994 「遼東半島新石器時代晚期文化的再認識」『考古』1994(6)
- 孫祖初 1991 「論小珠山中層文化的分期及与各地比較」『遼海文物學刊』1991(1)
- 唐洪源 1996 「東豐南部新石器時代遺址調查」『博物館研究』1996(2)
- 佟偉華 1989 「膠東半島与遼東半島原始文化的交流」『考古學文化論集』2
- 佟柱臣 1961 「東北原始文化的分布与分期」『考古』1961(10)
- 王青 1995 「試論山東龍山文化郭家村類型」『考古』1995(1)
- 王青 1998 「再論龍山文化郭家村類型」『北方文物』1998(3)
- 王嗣洲 2000 「大連北三市新石器文化研究」『北方文物』2000(4)

- 王嗣洲・金志偉 1997 「大連北部新石器文化遺址調查簡報」『遼海文物學刊』1997(1)
- 王王从 1992 「遼寧省瓦房店市謝屯鄉青銅時代遺址調查」『北方文物』1992(1)
- 王王从・陳國慶・劉俊勇 1992 「瓦房店市交流島原始文化遺址試掘簡報」『遼海文物學刊』1992(1)
- 王錫平・李步青 1987 「試論膠東半島與遼東半島史前文化的交流」『中國考古學會第六次年會論文集』
- 王秀嫣 1983 「撫順地區早晚兩類青銅文化遺存」『文物』1983(9)
- 王雲剛・王國榮・李飛龍 1996 「綏中馮家發現商代窖藏銅器」『遼海文物學刊』1996(1)
- 王增新 1958 「遼寧新民縣偏堡沙崗新石器時代遺址調查記」『考古通訊』1958(1)
- 吳汝祚 1985 「山東省長海縣砬磯島大口遺址」『考古』1985(12)
- 謝駿義・許俊臣 1983 「大連新金縣喬東遺址發掘簡報」『考古』1983(2)
- 徐光輝 1977 「旅大地區新石器時代晚期至青銅時代文化遺存分期」『考古學文化論集』4
- 徐建華 1994 「大連地區新石器時代文化和青銅時代文化斷代劃分」『遼海文物學刊』1994(1)
- 許明綱 1959 「旅大市的三處新石器時代遺址」『考古』1959(11)
- 許明綱 1961 「旅大市長海縣新石器時代貝丘遺址調查」『考古』1961(12)
- 許明綱 1979 「長海縣貝丘遺址發掘收穫」『遼寧大學學報哲學社會科學版』1979(5)
- 許明綱 1987 「試論大連地區新石器和青銅文化」『中國考古學會第六次年會論文集』
- 許明綱 1989 「遼東半島與山東半島原始文化的關係」『東北地方史研究』1989(1)
- 許明綱・劉俊勇 1981 「旅順於家村遺址發掘簡報」『考古學集刊』1
- 許明綱・許玉林・蘇小幸・劉俊勇・王瑾英 1981 「長海縣廣鹿島大長山島貝丘遺址」『考古學報』1981(1)
- 許明綱・於臨祥 1962 「旅大市長海縣新石器時代貝丘遺址調查」『考古』1962(7)
- 許玉林 1986 「遼寧東溝大崗新石器時代遺址」『考古』1986(4)
- 許玉林 1987 「後窪遺址考古新發現與研究」『中國考古學會第六次年會論文集』
- 許玉林 1988 「東溝縣西泉眼新石器時代遺址調查」『遼海文物學刊』1988(1)
- 許玉林 1989 「東北地區新石器時代文化概述」『遼海文物學刊』1989(1)
- 許玉林 1990 a 「海岫鐵路工程沿線考古調查和發掘情況簡報」『北方文物』1990(2)
- 許玉林 1990 b 「遼寧東溝縣石佛山新石器時代晚期遺址發掘簡報」『考古』1990(8)
- 許玉林・傅仁義・王伝普 1989 「遼寧東溝縣後窪遺址發掘概要」『文物』1989(12)
- 許玉林・高洪珠 1984 「丹東市東溝縣新石器時代遺址調查和試掘」『考古』1984(1)
- 許玉林・金石柱 1986 「遼寧丹東地區鴨綠江右岸及其支流的新石器時代遺存」『考古』1986(10)
- 許玉林・楊永芳 1992 「遼寧岫岩北溝西山遺址發掘簡報」『考古』1992(5)
- 許玉林・許明綱・高美璇 1982 「旅大地區新石器時代文化和青銅時代文化概述」『東北考古與歷史』1982(1)
- 許玉林・蘇小幸 1980 「略談郭家村新石器時代遺址」『遼寧大學學報哲學社會科學版』1980(1)
- 許玉林・蘇小幸 1984 「大連市郭家村新石器時代遺址」『考古學報』1984(3)
- 許玉林・蘇小幸・王嗣洲・孫德源 1994 「大連市北吳屯新石器時代遺址」『考古學報』1994(3)
- 許志國 1998 「遼北地區新石器時代文化初探」『北方文物』1998(2)
- 嚴文明 1983 「山東長海縣史前遺址」『史前研究』1983(1)
- 嚴文明 1989 「東夷文化的探索」『文物』1989(9)
- 嚴文明・張江凱 1987 「山東長島北莊遺址發掘簡報」『考古』1987(5)
- 張江凱 1997 「論北莊類型」『考古學研究』3
- 趙輝 1993 「龍山文化的分期和地方類型」『考古學文化論集』3
- 趙輝 1995 「遼東地區小珠山下、中層文化的再檢討」『考古與文物』1995(5)
- 鄭明 1981 「新民高台子新石器時代遺址和墓葬」『遼寧文物』1981(1)
- 鄭明・周陽生 1983 「新民高台山新石器時代遺址 1976 年發掘簡報」『文物資料叢刊』7
- 中國科學院考古研究所 1959 『洛陽中州路(西工段)』
- 中國社會科學院考古研究所 1980 『殷墟婦好墓』

- 中国社会科学院考古研究所 1996 『双砣子与崗上』
 朱延平 1996 「小珠山下層文化試析」『考古求知集』
 朱永剛 1993 「遼東地区新石器時代含条形堆紋陶器遺存研究」『青果集』

<韓文>

- 姜仲光 1974 「龍淵里遺蹟發掘報告」『考古學資料集』 4
 姜仲光 1975 「우리나라 新石器時代 널개무늬그릇 遺蹟의 年代에 대하여」『考古民俗論文集』 6
 姜仲光 1979 「新岩里遺蹟第 4 地点에 대하여」『歷史科學』 1979(2)
 科学院考古學 및 民俗學研究所 1957 『弓山原始遺蹟發掘報告』
 科学院考古學 및 民俗學研究所 1961 『智塔里原始遺蹟發掘報告』
 国立中央博物館 2006 『북녘의 문화유산』 展示圖錄
 김남돈 1995 「鐵原郡의 先史遺蹟」『鐵原郡의 歷史와 文化遺蹟』
 김동일·김광철 2001 「증산군龍德里新石器時代집자리에 대하여」『朝鮮考古研究』 2001(3)
 김성국 2000 「질그릇갓춤새를 통하여 본 南沿海州一帶新石器時代文化의 性格」『朝鮮考古研究』 2000(3)
 김성국 2005 「南沿海州地域新石器時代遺蹟의 相對年代」『朝鮮考古研究』 2005(3)
 김영근 2000 「大藩家村遺蹟에 대하여」『朝鮮考古研究』 2000(2)
 김영근 2001 「北吳屯遺蹟에 대하여」『朝鮮考古研究』 2001(1)
 김영근 2004 「遼東地方新石器時代遺蹟들의 年代」『朝鮮考古研究』 2004(4)
 김영우 1964 「細竹里遺蹟發掘中間報告 (2)」『考古民俗』 1964(4)
 金英熙 2002 『遼東半島新石器文化의 形成過程研究』 서울大學校博士學位論文
 金用玕 1961 a 「美松里洞窟遺蹟發掘中間報告 (1)」『文化遺産』 1961(1)
 金用玕 1961 b 「美松里洞窟遺蹟發掘中間報告 (II)」『文化遺産』 1961(2)
 金用玕 1963 a 「美松里遺蹟의 考古學的位置」『朝鮮學報』 26
 金用玕 1963 b 「美松里洞窟遺蹟發掘報告」『各地遺蹟整理報告』
 金用玕 1964 『金灘里原始遺蹟發掘報告』
 金用玕 1966 「西北朝鮮밧살 무늬 그릇 遺蹟의 年代를 論함」『考古民俗』 1966(1)
 金用玕 1979 「우리나라 新石器時代 질그릇갓춤새 變遷에 보이는文化發展의 固有性」『考古民俗論文集』 7
 金用玕 1990 『朝鮮考古學全書 原始篇 (石器時代)』
 金用玕·李淳鎮 1966 「1965 年度新岩里遺蹟發掘報告」『考古民俗』 1966(3)
 金用玕·石光濬 1984 『南京遺蹟에 關한 研究』
 金勇男 1963 「海州市龍塘浦조개무늬遺蹟調查報告」『考古民俗』 1963(1)
 金日成綜合大學 1986 『龍谷洞窟遺蹟』
 金政文 1964 「細竹里遺蹟發掘中間報告 (1)」『考古民俗』 1964(2)
 金鍾赫 1961 「中江郡長城里遺蹟調查報告」『文化遺産』 1961(6)
 金鍾赫 1991 「石叻山遺蹟의 遺物갓춤새에 대하여」『朝鮮考古研究』 1991(4)
 金鍾赫 1992 「鴨綠江下流域一帶新石器時代遺蹟들의 年代에 대하여」『朝鮮考古研究』 1992(4)
 金鍾赫 1993 「鴨綠江下流域一帶의 新石器時代질그릇갓춤새 變遷」『朝鮮考古研究』 1993(3)
 金鍾赫 2005 「表岱遺蹟에서 發掘된 新石器時代의 질그릇가마터에 대하여」『朝鮮考古研究』 2005(1)
 都宥浩 1960 『朝鮮原始考古學』
 李炳善 1961 「中江郡土城里原始 및 古代遺蹟發掘中間報告」『文化遺産』 1961(5)
 李炳善 1962 「平安北道龍川郡, 塩州郡一帶의 遺蹟踏查報告」『文化遺産』 1962(1)
 李炳善 1963 「鴨綠江流域밧살 무늬 그릇遺蹟의 特性에 關한 若干의 考察」『考古民俗』 1963(1)
 李炳善 1965 「鴨綠江流域밧살 무늬 그릇遺蹟의 繼承性에 對한 若干의 考察」『考古民俗』 1965(2)
 李淳鎮 1965 「新岩里遺蹟發掘中間報告」『考古民俗』 1965(3)

- 리원근 1961 「黃海南道北部地方遺蹟踏查報告」『文化遺産』1961(6)
- 裴眞晟 2003 「無文土器의 成立과 系統」『嶺南考古學』32
- 白弘基 1993 「東北亞平底土器의 研究」『韓國上古史學報』12
- 社会科学院考古學研究所 1977 『朝鮮考古學概要』
- 社会科学院考古學研究所·歷史研究所 1969 「紀元前千年紀前半期의 古朝鮮文化」『考古民俗論文集』1
- 社会科学院歷史研究所 1979 『朝鮮全史 1 原始篇』(第 1 版)
- 社会科学院歷史研究所·考古學研究所 1991 『朝鮮全史 1 原始篇』(第 2 版)
- 徐國泰 1986 『朝鮮의 新石器時代』
- 徐國泰 1998 『朝鮮新石器時代文化의 單一性과 固有性』
- 徐國泰·지화산 1994 「盤弓里遺蹟에 대하여 (1)」『朝鮮考古研究』1994(2)
- 徐國泰·지화산 1995 「盤弓里遺蹟에 대하여 (2)」『朝鮮考古研究』1995(2)
- 徐國泰·지화산 2003 「盤弓里遺蹟發掘報告」『馬山里, 盤弓里, 表岱遺蹟發掘報告』
- 서울대학교博物館 2002 『龍游島遺蹟』發掘調査現場說明會資料集
- 石光濬·김재용 2003 「구룡강遺蹟發掘報告」『강안리, 고연리, 구룡강遺蹟發掘報告』
- 石光濬·허순산 1987 「長村遺蹟發掘報告」『朝鮮考古研究』1987(4)
- 新義州歷史博物館 1967 「1966 年度新岩里遺蹟發掘簡略報告」『考古民俗』1967(2)
- 안병찬 1962 「平北道博川郡寧邊郡의 遺蹟調査報告」『文化遺産』1962(5)
- 유성진 2005 「吉林, 長春地區新石器時代遺蹟들의 先後關係」『朝鮮考古研究』2005(1)
- 李相俊·曹美順 2005 『大延坪島까치산貝塚』
- 李相俊·曹美順·金正延 2003 『延坪毛伊島貝塚』
- 林尚澤 2006 『韓國中西部地域 빗살무늬 土器文化研究』서울대학교博士學位論文
- 任孝宰 1969 「韓國西海中部島嶼의 櫛文土器文化」『考古學』2
- 任孝宰·梁成赫 1999 『永宗島 느들 新石器遺蹟』
- 任孝宰·梁成赫·禹延延 2002 『烏耳島 뒷살막 貝塚』
- 정봉찬 1997 「올레니 1 遺蹟과 西浦項遺蹟의 互相關係에 대하여」『朝鮮考古研究』1997(2)
- 鄭燦永 1961 「慈江道時中郡深貴里原始遺蹟發掘中間報告」『文化遺産』1961(2)
- 鄭燦永 1983 a 「I. 深貴里遺蹟」『鴨綠江, 禿魯江流域高句麗遺蹟發掘報告』
- 鄭燦永 1983 b 「IV. 土城里遺蹟」『鴨綠江, 禿魯江流域高句麗遺蹟發掘報告』
- 《朝鮮遺蹟遺物圖鑑》編纂委員會 1988 『朝鮮遺蹟遺物圖鑑 1 原始篇』
- 朝中共同發掘隊 1966 『中國東北地方의 遺蹟發掘報告』
- 진소래 1997 「遼東半島新石器文化研究」『韓國上古史學報』24
- 차달만 1992 「堂山조개무지遺蹟發掘報告」『朝鮮考古研究』1992(4)
- 차달만 1993 a 「淸川江流域青銅器時代遺蹟들의 年代」『朝鮮考古研究』1993(2)
- 차달만 1993 b 「堂山遺蹟 옷文化層 질그릇갓춤새의 特徵에 대하여」『朝鮮考古研究』1993(4)
- 차달만 1997 「鴨綠江및 淸川江流域의 褐色민그릇갓춤새의 變遷」『朝鮮考古研究』1997(2)
- 千羨幸 2005 「韓半島突帶文土器의 形成과 展開」『韓國考古學報』57
- 黃基德 1958 「朝鮮西北地方原始土器의 研究」『文化遺産』1958(4)
- 차달만 1997 「鴨綠江및 淸川江流域의 갈색민그릇갓춤새의 變遷」『朝鮮考古研究』1997(2)
- 黃基德 1966 「西部地方팽이그릇遺蹟의 年代에 대하여」『考古民俗』1966(4)
- 黃基德 1984 『朝鮮의 青銅器時代』
- 無記名 1988 「鴨綠江流域, 遼東半島南端이른 時期 新石器時代遺蹟들에 대하여」『朝鮮考古研究』1988(3)

〈露文〉

Бродянский, Д.Л. 1979 Проблема периодизаций и хронологии неолита Приморья. *Древние культуры Сибири и*

Тихоокеанского бассейна. Новосибирск

Бродянский, Д.Л. 1987 *Введение в Дальневосточную археологию*. Владивосток

Окладников, А.П. 1970 *Неолит Сибири и Дальнего Востока. Каменный век на территории СССР. МИА 166*.
Москва

Попов, А.Н. и С.В. Батаршев 2002 *Археологические исследования в Хасанском районе Приморского края в 2000 г. Археология и культурная антропология Дальнего Востока*. Владивосток

〈日文〉

秋山進午 1995 「遼寧省東部地域の青銅器再論」『東北アジアの考古学研究』

安在皓・千羨幸 2004 「前期無文土器の文様編年と地域相」『福岡大学考古学論集 - 小田富士雄先生退職記念 -』

伊藤慎二 2005 「第四章 総括」『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅱ』

江上波夫・駒井和愛・水野清一 1934 「旅順双台子山新石器時代遺跡」『人類学雑誌』49(1)

小川静夫 1982 「極東先史土器の一考察」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』1

大貫静夫 1994 「韓永熙「中・西部地方の櫛目文土器」について」『The second Pacific Basin International Conference on Korean Studies Archaeology Seminar』

大貫静夫 1998 『東北アジアの考古学』

後藤直 1971 「西朝鮮の「無文土器」について」『考古学研究』17(4)

小原哲 1987 「朝鮮櫛目文土器の変遷」『東アジアの考古と歴史』上

島田貞彦 1927 「貔子窩遺跡発掘記」『民族』2(6)

澄田正一 1986 「遼東半島の先史遺跡（調査抄報）：文家屯遺跡（一）」『愛知学院大学文学部紀要』16

澄田正一 1990 「遼東半島の先史遺跡：貔子窩付近分布調査」『人間文化』5

千葉基次 1990 「遼東地域の連続弧線文土器」『東北アジアの考古学 [天池]』

千葉基次 1996 「遼東青銅器時代開始期」『東北アジアの考古学第二 [檣域]』

鄭漢徳 1996 「美松里型土器形成期に於ける若干の問題」『東北アジアの考古学第二 [檣域]』

鳥居龍蔵 1910 『南満州調査報告』

中村大介 2005 「無文土器時代前期における石鏃の変遷」『待兼山考古学論集：都出比呂志先生退任記念』

西谷正 1977 「細竹里の土器をめぐる問題」『考古論集：慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集』

浜田耕作 1927 「貔子窩の土器」『民族』2(6)

浜田耕作 1929 『貔子窩』

原田淑人・駒井和愛ほか 1931 『牧羊城』

福田正宏 2004 「ロシア沿海州における新石器時代の土器編年について」『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅰ』

藤口健二 1986 「6 朝鮮無文土器と弥生土器」『弥生文化の研究 3 弥生土器Ⅰ』

古澤義久 2005 「立教大学所蔵中国大連市郭家村遺跡出土資料」『MOUSEION (ムゼイオン)』51

古澤義久 2006 a 「韓半島新石器時代後・晩期二重口縁土器の生成と展開」『日韓新時代の考古学』

古澤義久 2006 b 「東北アジア先史時代紡錘車研究」『日本中国考古学会 2006 年大会発表資料集』

古澤義久 印刷中 「東京大学文学部所蔵郭家村遺跡資料」『遼寧を中心とする東北アジア古代史の再構成』

三宅俊成 1933 「長山列島の史蹟と伝説」『満蒙』14(8)

三宅俊成 1936 「長山列島先史時代の小調査」『満州学報』4

三宅俊成 1975 『東北アジア考古学の研究』

宮本一夫 1985 「中国東北地方における先史土器の編年と地域性」『史林』68(2)

宮本一夫 1986 「朝鮮有文土器の編年と地域性」『朝鮮学報』121

宮本一夫 1990 「海峡を挟む二つの地域」『考古学研究』37(2)

宮本一夫 1991 「遼東半島周代併行土器の変遷」『考古学雑誌』76(4)

- 宮本一夫 1995 「遼東半島新石器時代土器編年の再検討」『東北アジアの考古学研究』
八木奨三郎 1924 『満州旧蹟志（上篇）』
李権生 1991, 1992 「山東半島の先史文化の編年及び魯中南の関係（上・下）」『考古学研究』 38(3, 4)
遼東先史遺跡発掘報告書刊行会 2002 『文家屯 1942年遼東先史遺跡発掘調査報告書』

〈英文〉

- Furusawa, Y. 2007 A study on the prehistoric spindle-whorls in the Russian south Primor'e and its Neighbourhoods 『東北アジアの環境変化と生業システム (A study on the environmental Change and Adaptation System in Prehistoric Northeast Asia)』 Kumamoto
Okladnikov, A.P. 1981 *Art of the Amur – Ancient art of the Russian Far East (Древнее искусство Приамурья)*. Leningrad-Newyork

〈図版出典〉

図 1 筆者作図, 図 2-1, 5 筆者撮影, 同 -2, 3, 6, 7, 8 許玉林・蘇小幸 1984, 同 -4, 9 張江凱 1997, 図 3-1 許明綱ほか 1981, 同 3-2 筆者実測, 図 4-1 巖文明・張江凱 1987, 同 -2 筆者撮影, 同 -3 北京大学考古実習隊ほか 2000a, 同 -4, 5 筆者実測, 図 5-1 蔣英炬 1963, 同 -2 北京大学考古実習隊ほか 2000, 同 -3 筆者実測, 図 6-1 ~ 3 王嗣洲・金志偉 1997, 同 -4 ~ 8 澄田 1990, 図 7 筆者実測, 図 8-1, 2, 3 筆者実測, 同 -4, 5 吳汝祚 1985, 図 9 筆者実測, 図 10-3, 4, 23, 29, 30 筆者実測, 残りは各報告から転載, 図 11-19, 43 ~ 49 筆者実測, 残りは各報告から転載, 図 12 各報告から転載, 図 13 各報告から転載, 図 14 侯建業 2006, 図 15 王嗣洲・金志偉 1997, 図 16 各報告から転載, 図 17 各報告から転載, 図 18 各報告から転載, 図 19 各報告から転載, 図 20 各報告から転載, 図 21-1 ~ 3 任孝宰ほか 2002, 同 -4 서울大学校博物館 2002, 図 22-1 ~ 4 李相俊・曹美順 2005, 同 -5 김남돈 1995, 同 -6 李相俊ほか 2003, 同 -7 筆者実測, 図 23 各報告から転載, 図 24 各報告から転載, 表 1 ~ 表 5 筆者作成

補記

遺憾なことに諸般の事情により入手困難だった『朝鮮考古研究』2006年2号を、脱稿後、ようやく入手した。ここに掲載されている김광철の論文(김광철 2006)は本稿に関連する内容であるため簡単に触れる。김광철論文では徐国泰の見解(徐国泰 1998)を参考にしながら、新たに知られた遺蹟を追加し、4個の文化期に遼東半島の新石器時代を区分している。かつて김영근の見解(김영근 2004)では、遼東半島と瀋陽地区を合わせた遼東地方という枠組みの中で偏堡類型の段階(김영근の高台山遺蹟2期層時期)を設定していたが、김광철は遼東半島というさらに限定した地域の中でも偏堡類型の段階を独立した段階(김광철の3文化期)として設定している。김광철の3文化期は本稿の三堂村1期に相当し、遼東半島でも偏堡類型の段階が区分できることを明確に示した点に賛意を表するものである。

김광철 2006 「遼東半島一帶 新石器時代 질그릇갓춤새의 變遷」『朝鮮考古研究』2006 (2)